

愛知県版

チームオレンジ事例集



はじめに

地域や職域において、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、本人や家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」は、これまでに全国で約1,653万人、愛知県で約87万人（いずれも2025年9月末現在）が養成されています。

国が策定した「認知症施策推進大綱」（2019年6月）では、できる範囲で手助けを行うという認知症サポーターの活動の任意性は維持しつつ、認知症の人や家族の支援ニーズと認知症サポーターを中心とした支援をつなぎ、認知症になっても安心して暮らし続けられる地域づくりの具体的活動「チームオレンジ」を2025年度までに全市町村で取り組むこととされています。

本県では、チームオレンジの更なる推進を図るため、2023年から、県内市町村におけるチームオレンジの活動を紹介する事例集を作成しています。今回、新たな事例を加え、23市町28事例（2025年3月末現在）を掲載しています。

本事例集で紹介するチームオレンジは、規模（市町村全域をカバーするもの、校区や地区単位のもの等）や活動内容（普及啓発、交流、共感、困りごと・やりたいことの支援等）、成り立ち（認知症カフェやサロン等の既存の資源の活用や講座受講者の有志たちによる活動、本人や家族の想いの実現等）など、それぞれの地域に応じて非常に多様であり、幅広い活動が展開されていますが、いずれのチームも認知症になっても住み慣れた地域で希望を持って日常生活を過ごしていくことを目指されているのではないかと思います。

本事例集がチームオレンジの整備や運営、活動等の参考になれば幸いです。

2025年12月 愛知県福祉局高齢福祉課
地域包括ケア・認知症施策推進室

目次

(※) 2025年12月追加事例

<事例の構成について>	1
【豊橋市】認知症の方の夢や希望を尊重し実現できる取り組みへ (※)	3
【一宮市】みんなでつくる すまいるかふえ	8
【瀬戸市】オレンジサポーターと認知症当事者が活躍できるまちづくりの推進	13
【豊川市】自分がしたい暮らしを最後まで安心してできるまち	21
【碧南市】オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う「交流拠点」	26
【刈谷市】認知症にやさしい街づくり (※)	31
【安城市】認知症理解を市や地域で推進するために活動しています	35
【西尾市】認知症にやさしいまちへ	40
【犬山市】コミュニティみんなで地域を支えよう	43
【犬山市】共感の場づくり	48
【常滑市】笑顔で活動・地域へ広がる支援の輪！	51
【江南市】チームオレンジにおける地域活動の推進	59
【小牧市】笑顔でつなぐみんなのカフェ	64
【新城市】認知症の方に優しいまちづくりのために活動しています	69
【東海市】サポーターも楽しんで活動、活躍を！	73
【大府市】認知症サポーター養成講座を受けたボランティアが活躍	79
【高浜市】もの忘れがあっても大丈夫。仲間と笑顔でつながる家族会	82
【岩倉市】いわくら認知症ケアアドバイザー会による認知症啓発活動について	86
【豊明市】おたがいさま活動（暮らしの困りごと支援）	90
【豊明市】キャラバン・メイトとともに歩む希望の居場所づくり	94
【北名古屋市】コスモスの花のように華麗に、みんなで輝こう♪	97

【北名古屋市】「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！	・・・・・・・・101
【東郷町】誰でも気軽に参加することが出来るサロン	・・・・・・・・104
【東郷町】皆でやりたいことを話し合うことが出来るサロン（※）	・・・・・・・・107
【東郷町】誰もが参加しやすいサロン	・・・・・・・・110
【豊山町】気軽に立ち寄れる認知症カフェ運営を目指す（※）	・・・・・・・・113
【扶桑町】認知症になっても社会参加のできる通いの場（※）	・・・・・・・・117
【蟹江町】誰もが役割を持ち、人がつながりあえる場所	・・・・・・・・121
<参考>	・・・・・・・・127

本事例集には、以下の2種類をチームオレンジとして掲載しています。

①「チームオレンジの三つの基本※」を満たすもの

②三つの基本は満たさないものの、本人・家族のニーズとステップアップ講座を受講した認知症サポーターを中心とした支援をつなぐ仕組みが構築されているもの

※チームオレンジ三つの基本（全国キャラバンメイト連絡協議会発行「コーディネーター研修テキスト 認知症サポーターチームオレンジ運営の手引き」から抜粋）

（１）ステップアップ講座修了及び予定のサポーターでチームが組まれている。

（２）認知症の人もチーム員の一人として参加している。（認知症の人の社会参加）

（３）認知症の人と家族の困りごとを早期から継続して支援ができる。

<事例の構成について>

チームオレンジ取組事例【〇〇市・□□町】

【チーム名】()

【タイトル】()

チームによっては、チーム名をつけていないものもあります。

タイトルには、チームの活動や特徴を一言でまとめたものを記載しています。

1. 自治体情報

(1) 人口

(2) 高齢者人口

(3) 高齢化率

(4) 面積

(5) 日常生活圏域

(6) 地域包括支援センター数

ここには、自治体の基本情報（人口や高齢化率、地域包括支援センター数等）を記載しています。

2. 活動の概要

(1) 活動開始時期

(2) 活動実施主体

(3) 活動内容

(4) 活動頻度

(5) 利用料金

(6) 運営財源

(7) 連携する機関等

(8) メンバー（チーム員）構成

(9) チームオレンジ
コーディネーターの属性

(10) チームオレンジの類型

ここには、チームオレンジの活動の概要（活動実施主体や活動内容、メンバー構成、チームオレンジの類型※）を記載しています。

※チームオレンジの類型については、
<参考> P 1 2 7 参照。

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

ここには、活動を開始するまでの経緯（地域課題の状況、問題意識、きっかけ、関係機関への働きかけや調整、チームオレンジコーディネーターの役割、チームオレンジの元となる活動や取組等）と現在までの経過を記載しています。

4. 活動内容

ここには、活動の内容について写真や図なども使用しながら記載しています。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

ここには、生活支援コーディネーターとの連携、活動が軌道に乗るまでの試行錯誤、認知症サポーターへの働きかけ等を記載しています。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

<認知症の人本人への働きかけについて>

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

<課題>

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

9. ここがポイント！

ここには、自治体で活動しているチームオレンジの特徴やアピールしたい点などを記載しています。

<愛知県から>

ここには、事例の概要や特徴などの県からのコメントを記載しています。



チームオレンジ取組事例【豊橋市】

【チーム名】（チームオレンジとよはし）

【タイトル】（認知症の方の夢や希望を尊重し実現できる取り組みへ）

1. 自治体情報（2025年4月1日現在）

（1）人口	364,737人
（2）高齢者人口	97,820人
（3）高齢化率	26.8%
（4）面積	262.05km ²
（5）日常生活圏域	22圏域
（6）地域包括支援センター数	18か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2024年8月開始
（2）活動実施主体	市町村、住民・ボランティア、市社会福祉協議会
（3）活動内容	認知症の本人や家族の思いを聴き、その思いに沿って活動。具体的には、本人の希望に沿って一緒に外出したり、お話をしたり、編み物やバレー、ゴルフ等を一緒に楽しんでいる。
（4）活動頻度	個別活動のため、ケースによって活動頻度が異なる
（5）利用料金	基本的には無料 ※活動内容により飲食代などの自己負担あり
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、認知症地域支援推進員
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：52人（R7.8月現在） （認知症地域支援推進員を除く） <以下、チームを構成する属性> ・認知症サポーター講座、ステップアップ講座を受講した者のうち、チームオレンジの登録を希望した者 ・認知症の本人・家族
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【豊橋市の状況】

豊橋市では「認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らせるまち」を目指し、認知症に関する正しい知識や認知症の本人への接し方について学ぶ、認知症サポーター講座を平成17年度から開催し、令和6年度末で延べ56,400人の「認知症サポーター」が誕生している。そして、令和6年度には、さらなる高齢化に備え、「共生」の地域づくりを推進するため、認知症サポーターにむけてステップアップ講座を開催し、認知症の方やご家族の思いを聴き、その思いに沿った活動を行う「チームオレンジとよはし」が発足した。

【チームオレンジコーディネーターの役割】※認知症地域支援推進員1名が担う。

- ・地域で暮らす本人・家族の支援ニーズを把握するため、本人ミーティング等の場の活用や地域・職域からの情報収集・分析
- ・ステップアップ講座の企画や受講勧奨など実施支援
- ・ステップアップ講座を受講した認知症サポーター等によるチームオレンジの編成支援
- ・チームオレンジの運営に対する助言
- ・チームオレンジ活動において圏域を越えたメンバーの調整

【チームオレンジ圏域リーダーの役割】※認知症地域支援推進員3名（コーディネーター以外）が担う。（市内を3圏域に分け、圏域ごとに1名。）

- ・チームオレンジ定例会の開催の支援
- ・本人・家族の支援ニーズに応じて、適切と判断したチームに活動の依頼
- ・本人・家族の支援ニーズと活動・メンバーのマッチングの支援
- ・チームオレンジ活動において圏域内でチームを越えたメンバーの調整
- ・本人・家族の視点を反映したチームオレンジの活動方針の検討の支援
- ・チームオレンジの活動により生じた問題への対応

4. 活動内容

チームオレンジとよはしは、本人の思いを聴くため、オレンジカフェ、グループホーム等でのインタビュー、オレンジカフェへの本人の夢や希望を聴くボードの設置、福祉職の集まる場やホームページ、広報、ポスター等でチームオレンジの啓発を行い、その中で聴かれた本人の夢や希望の実現に向けて活動を展開している。 ※R6年度 活動数63件(R6.8月発足)

事例①本人のやりたいこと『バレーがしたい』

ご本人は、元タママさんバレーチームに所属し、活躍をされていた。認知症と診断を受け、活動をやめられていたが、テレビでバレーの試合の観戦を楽しむなどバレーが好き



という話を聞いていたため、推進員からバレーをやってみませんか？と誘った。夫はもうでき

ないよと言われていたが、ご本人はとてもうれしそうに「うん」と言ってくれたため、活動を計画。バレー当日は、とても緊張していた様子があったが、最後にはとても笑顔になり、楽しかったと言ってくれ、喜ばれていた。この活動をきっかけに、外に出て、家族以外と関わる機会が増えていった。夫も活動が続けて行く中で、人とのふれあいは大事と感じてくださった。以前はご主人の顔を見ながら、首を傾けたり、わからないと言ったり不安にしている様子が多かったが、人との活動が増えていく中で、発語や笑顔が増えていっている。

事例②本人のやりたいこと『編み物がしたい』

グループホームで出会った方から以前からの趣味である編み物をやりたいという声を聴き、定期的にチームオレンジメンバーと編み物を楽しむ活動をしている。作品が出来上がるより、チームオレンジメンバーとお喋りしながら編み物ができることが一番嬉しいと喜んでいただいている。編み物の活動の最後には同じ姿勢で疲れが出ないように、体操ができるチームオレンジメンバーがコリ取り体操を実施している。



事例③本人のやりたいこと『本屋に行きたい』

有料老人ホームに入居されているご本人は元々、活動的に過ごされていた方。第一弾として「観劇がしたい」と劇場に行った帰りに、寡黙なご本人から「次は本屋に行きたい」とのお話が出た。本屋に行く活動を計画。本屋では自ら興味のある本に手を伸ばし、6冊を購入され、ご満悦な様子であった。本屋のあとはカフェに移動し買った本を見ながらメンバーとお茶を楽しんだ。ご本人との関わりの中で出てきた希望を叶えるような活動ができるように「ご本人の声」を大切にしている。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

開始年度のステップアップ講座の開催にあたっては、本課の別事業で養成しているボランティアの方へ講座を案内し参加いただいた。はじめの頃は本人の声がなかなか聴けず、活動のイメージがわからないとの声があったが、本人の声を聴く活動を行う中でメンバーも活動をイメージできるようになり、現在は、主体的な活動が行われている。今年度のステップアップ講座では、実際に活動している一期生のメンバーの声を聴ける時間を多く設け新メンバーが具体的なイメージを描けるよう工夫している。

チームオレンジの活動内容については、月に1回開催される定例会等で共有・検討し、活動後はメンバー間で振り返りを実施している。活動の参加者募集は定例会や公式LINE等で呼びかけ、調整をしている。定例会では、メンバーのスキルアップのため、メンバーの希望を聴きながらミニ講座を開催している。

また、万が一の時のために市民活動総合保障制度で対応できるようにしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

ステップアップ講座は令和6年度から年1回開催し、毎回20名前後のチームオレンジメンバーを養成している。令和7年度の対象は認知症サポーター講座を受けている市民へ広く周知している。

<認知症の人本人への働きかけについて>

事前にスケジュールをわかりやすい形（文書やメール等）で伝えること、静かで落ち着いた安心できる環境を整えること、表情やジェスチャーを交え、ゆっくり話し、わかりやすい言葉を使うこと、本人のペースに合わせ無理強いしないことを意識している。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

オレンジカフェやグループホーム等で本人の声を直接聴く活動を実施しており、市内のオレンジカフェには本人の夢や希望を書けるボードを設置している。また、福祉職の集まる場でのチームオレンジの活動紹介やホームページ、広報、ポスター等でチームオレンジの啓発を行い、本人や家族の夢や希望を聞いた際に入力できる入力フォームの周知をしている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>～活動前後の変化～

- ・以前に比べると安心している様子がある（担当ケアマネジャーから）
- ・本人の笑顔が増え、人と話すことや外に出ることを楽しみにされるようになった。
- ・本人が笑顔になることで家族も笑顔が増えている。
- ・これに行きたい、これが好きという自分の思いが少しずつ聞かれるようになっている。
- ・将棋の相手が来てくれることを楽しみに待っていて、生活のハリにつながった。

<課題>

- ・メンバーは仕事や他のボランティア等で多忙な方が多く、新たなメンバーを養成し、一部のメンバーに負担が偏らないようにしていく必要がある。
- ・活動に伴う諸費用（交通費、飲み物、施設利用料等）がメンバーの自己負担となっている。
- ・圏域リーダー（認知症地域支援推進員）が活動の調整を主に実施しているが、今後、活動の拡大に伴い、メンバーがチームリーダーとして主体的に活動の調整、実施、振り返りができることを目指していく必要がある。
- ・MC I や診断直後の方など早期にチームオレンジ等の社会資源を情報提供できるよう医療機関との連携を進めていく。また、企業団体等とも連携し、「認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちづくり」を進めていく。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 定期的な活動は、チームオレンジメンバーが中心となって主体的に活動を実施、展開していけるとようにしていきたい。
- ・ 今後も、積極的に啓発を行い、本人の声を聴く機会を増やして、活動につなげていく。
- ・ MC I や診断直後の方など早期にチームオレンジ等の社会資源を情報提供できるよう医療機関との連携を進めていくことにより、介護サービス利用前までの空白の期間を、「共生」という考え方のもと、本人のやりたいことができる尊厳ある日々につながることを期待している。
- ・ 活動を広く市民へ周知し、チームオレンジメンバーとして活躍する認知症のご本人を増やしていき、認知症の理解を深め、活動内容を充実させていくことで『認知症になっても誰もが安心して暮らせるまち』を目指していく。

9. ここがポイント！

- ・ チームオレンジとよはしは、認知症の本人や家族の声を聴いて活動内容を決めています
- ・ メンバーは様々な経歴や特技・趣味をお持ちの個性豊かな方々です。外出支援や話し相手など、メンバーの得意なことを活かして、できる範囲で行える手助けを行っています。
- ・ 認知症のご本人やご家族と『一緒に行く』『一緒に楽しむ』ことを大切にしています。

<愛知県から>

- ・ 認知症の人のやりたいことの実現に向けて環境・体制を整備するだけでなく、チームメンバーも一緒になって楽しまれている様子が印象的でした。
- ・ 市内オレンジカフェにおいて認知症の人が自身の夢や希望を書ける専用ボードを設置されるなど、支援ニーズの把握に積極的な印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【一宮市】

【チーム名】（オレンジスマイル萩）

【タイトル】（みんなでつくる すまいるかふえ）

1. 自治体情報（2025年4月1日現在）

（1）人口	375,827人
（2）高齢者人口	103,435人
（3）高齢化率	27.5%
（4）面積	113,82km ²
（5）日常生活圏域	6圏域
（6）地域包括支援センター数	7か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年6月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	認知症カフェ運営、認知症普及啓発のサポート
（4）活動頻度	隔月1回（第2土曜日13:30～15:00）
（5）利用料金	200円（飲食代）
（6）運営財源	会費・参加費
（7）連携する機関等	市内認知症地域支援推進員、認知症初期集中支援チーム、隣接市地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、グループホーム
（8）メンバー（チーム員）構成	<p>チーム員：20人 （認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員を除く）</p> <p><以下、チームを構成する属性></p> <p>認知症当事者、介護家族、地域住民、認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員、特別養護老人ホーム職員（介護職、調理員、ケアマネジャー）、グループホーム職員、ボランティア、居宅介護支援事業所ケアマネジャー、地域密着型通所介護職員</p>
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（委託）
（10）チームオレンジの種類	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・令和2年、当センターの母体である高齢者施設の職員全員を対象に認知症サポーター養成講座を開催した。
- ・受講者全員に事後アンケートを実施し、「地域でも認知症普及啓発をしたい」等の記載が複数名からあったため、包括と一緒に地域づくりをできるボランティア募集を行い、14名の応募があった。
- ・ボランティアメンバーで毎月会合を行い、メンバーそれぞれがやりたいこと、できることを意見交換し、活動内容やチーム名を検討した。メンバー全体の取組みとして、認知症カフェの開催、個々のスキルアップのためステップアップ研修を受けたいとの意見が出た。
- ・メンバーは令和3年～令和4年にかけて、ステップアップ講座として認知症当事者、認知症初期支援チーム、ワーキングデイサービスからの講話を認知症地域支援推進員が調整し受講した。
- ・認知症カフェについて、包括に関わる認知症当事者や家族のエピソードを情報共有し、「みんながホッとできる場所をつくりたい」との思いで内容の検討等を行った。
- ・コロナ禍にあり既存のカフェにメンバーが見学に行くことができず、認知症地域支援推進員が見学した内容を共有したり、隣接する市のステップアップ講座や認知症カフェの立ち上げをする団体の会合に参加し情報共有を行った。
- ・コロナ禍でかふえの開催ができない中でも、かふえのネーミング選定、テーマソングの検討、体操の考案や内容の検討などを行った。

オレンジスマイル菰のロゴマーク⇒



4. 活動内容

【認知症カフェ（すまいるかふえ）】

- ・隔月第2土曜日13:30～15:00 に開催。
 - ・令和5・6年度は、感染対策でお休みした以外は、月1回定期開催ができた。認知症当事者や家族で常連となっている方も増え、当事者、家族それぞれのピアカウンセリングの場となっている。
- また、介護家族の知人、デイサービスには行きたくないがかふえは参加したい方、他の家族と交流をしたい方など、参加目的もさまざまである。



レクリエーションの様子



交流会



すまいるかふえ看板

【認知症の普及啓発】

- ・地域包括支援センターが地域や企業と認知症の普及啓発活動をおこなうことがある。参加者に粗品を渡したいことを認知症地域支援推進員がメンバーに相談し、賛同したメンバーが素材提供、粗品づくりに協力をしてもらった。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【参加者が参加・活動するうえでの工夫・配慮】

- ・認知症当事者から一期一会を大切にしたいとの思いがあり、簡単な自己紹介を毎回おこない名札も作成している。
- ・交流会で話しやすくなるきっかけづくりのため毎回アイスブレイクを実施。身体を動かすこと、脳トレ、介護予防すごろく（手作り）など毎回重ならないようにしている。
- ・参加を予約制にしており、開催日次回分のちらしを配布している。事前予約を忘れてしまう方もいるため電話で連絡をして参加確認をしている。
- ・受付時参加費用の支払いをしてもらっているが、支払いをしたか不安になる方があった。当事者・家族と相談し、すまいるかふえオリジナル領収書を作成し必要な方のみに渡すようにしている。
- ・当事者同士で話が合いそうな方や介護者で困り事が同じような内容の方などピアカウンセリング要素も考慮し認知症地域支援推進員が配席を考えている。交流会では参加者同士で会話ができていない場合には運営メンバーは見守り、難聴で聞こえにくく、話題に付いていくことが困難な参加者には運営メンバーが会話の橋渡しをしたり、敢えて1対1で交流をするよう工夫もしている。

参加目的によっては、専門職が隣に座るなどして、自然に専門職への相談や制度の話をするように工夫をしている。

【運営メンバーが活動するうえでの工夫・配慮】

- ・メンバーの参加は強制しない。できる範囲で活動をしてもらうこととし、小物づくりが得意な人、かふえのドリンク準備など裏方でも協力してもらえるように声掛けをしている。
- ・都合が合わず、なかなか参加ができないメンバーにも顔を合わせて話す機会をできるだけつくり、かふえの現状を伝えたり意見を確認している。かふえの在り方だけでなく、取り組みたいことや研修を受けたい内容等を確認している。
- ・メンバーと一緒につくりあげるチームを意識し、何かを決定する時には意見交換をしたり、かふえの内容や運営への提案をしてもらうようにしている。
- ・地域包括支援センターで支援している当事者や家族、以前から付き合いのある若年性認知症当事者の方とも適宜相談をしながらメンバーと共有するようにしている。
- ・参加者に対して配慮が必要な方、情報共有が必要な方について事前に当月担当で打合せをしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・現在のかふえが本格稼働しているため、メンバーのステップアップ研修がなかなか開催できていないが、メンバーが研修を受けたいと希望している内容があるため今後も予定していく。
- ・かふえに限らず認知症関連の情報をメンバーに提供し、ステップアップ講座の受講きっかけづくりにしている。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・かふえの中では参加者をあまり「お客様」として丁重に扱い過ぎず、運営者も参加者も大きく区別せず、それぞれができることを手伝ってもらうようにし役割を持ってもらうようにしている。
- ・認知症かふえ終了後、互いに良かった点や気を付けた方が良かった点など毎回振り返りをおこなうようにしている。
- ・認知機能低下のある方など引きこもりがちになっていたり、家族が気分転換を必要としていたりかふえ参加の必要性がある方を中心に、外出のきっかけづくりや地域と繋がりが保てるように声掛けをしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・専門職も参加しているため、参加者が相談したいことやメンバーが対応に困ったことなど相談に応じるようにしている。
- ・個別相談という程ではないが、知識を得たいという家族の参加もあるためアイスブレイク後の茶話会の際に情報提供をしたり、意見交換ができるようにしている。また振り返りの際にどのようなことに悩んでいたか、どのようなことに関心を持っていたか等を共有している。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症当事者は「自分で頑張って取り組んでいることをみんなに知ってもらえる良い機会になっている」、家族は「家族同士の交流や意見を知りたいと思っただけだったけど、レクリエーションに参加したり、雑談をすることで気分転換になっていて楽しい」と楽しみに待っていてくれる人がある。それを聞くことでメンバーのモチベーションに繋がっている。
- ・定期的を開催することができていることで、本人や家族の中に1つの外出先と位置づけられてきているケースもでてきている。

<課題>

- ・認知症かふえに参加したくても移動手段がない、バスの時間が合わないとの意見がある。
- ・メンバーは仕事も両立しているため運営者が少ないことがある。新たなメンバーを増やしていきたい。
- ・かふえの内容は大まかに決めて開催しているが、包括職員が内容・チラシ作成・当日の運営を主で担うことが多く、メンバーにも負担のない範囲で役割を担ってもらえるよう打合せが必要。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 認知症の相談が年々増加傾向にあり、対応で悩む家族、住民もたくさんいるため、かふえやチームでの活動を通して認知症を正しく理解し対応ができるような地域づくりを考えていきたい。
- ・ 参加者、運営者を増やしていけるよう地道に様々な場面で周知していきたいと考えている。
- ・ 移動に苦慮している参加者もあるため、送迎などに協力してもらえる支援者を発掘していく。

9. ここがポイント！

- ・ オレンジスマイル萩は、メンバーが、自分たちも楽しみながら、できる時に、できることをしながら活動をしています。
- ・ すまいるかふえには専門職や介護経験者などもあるため専門的な相談やピアカウンセリングにも繋げることができます。
- ・ すまいるかふえは形式的なことに捉われ過ぎないように、認知症当事者、家族、メンバーなどみんなで意見を出し合い一緒に作りあげていくことを大切にしています。
- ・ 「できないこと」よりも「できること」を大切に、これからもすまいるかふえに参加しているみなさんにとって「ホッとできる居場所づくり」をしていきます。

<愛知県から>

- ・ 参加者の属性に応じて配席を工夫されるなど、当事者同士の交流・ピアサポートに力を入れているところが印象的でした。
- ・ チームメンバーに対して活動への参加を強制しないなど、負担感なく継続できるような体制を構築されています。



チームオレンジ取組事例【瀬戸市】

【チーム名】（チームオレンジせと）

【タイトル】（オレンジサポーターと認知症当事者が活躍できるまちづくりの推進）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	125,525人
（2）高齢者人口	38,137人
（3）高齢化率	30.3%
（4）面積	111.40km ²
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	7か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年4月開始（個別活動が始動）
（2）活動実施主体	市町村、地域包括支援センター、瀬戸旭医師会
（3）活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・個別活動 ・出張！せとらカフェ♪※（プロジェクト） ・おいでんサロン（プロジェクト） ・オレンジガーデニング（プロジェクト） ※せとらカフェ：瀬戸市認知症カフェ
（4）活動頻度	<ul style="list-style-type: none"> ・個別活動：ケースによって活動頻度が異なる ・出張！せとらカフェ♪：随時 （＋開催に伴う事前打ち合わせ：随時） ・おいでんサロン：月2回（第2・4水曜日） ・オレンジガーデニング：随時
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	瀬戸市認知症地域支援推進員（社会福祉協議会・瀬戸旭医師会）、せとらカフェ（瀬戸市認知症カフェ）、公民館や交流センター、瀬戸みどりのまち病院を始めとする市内医療機関、瀬戸の情熱伝道師※、少年院、デイサービス、市内薬局・スーパー・ショッピングセンター 等 ※瀬戸の情熱：瀬戸市で実施しているオリジナル口腔ダンス・ストレッチ
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：118人 ＜以下、チームを構成する属性＞ オレンジサポーター（81名、認知症サポーター養成講座を受講し、その後ステップアップ研修を受講した者のうち、チームオレンジの登録を希望した者）、認知症当事者や家族、認知症地域支援推進員
（9）チームオレンジコーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【瀬戸市の状況】

- ・2016年度から、認知症サポーター養成講座受講者向けのステップアップ研修を実施していたが、その後の活動支援を行っていなかった。また、認知症施策を認知症地域支援推進員が中心となって担っていたが、認知症施策の普及啓発にあたり、人手不足による事業拡大への課題を感じている。

【立ち上げの経緯】

- ・チームオレンジの整備を検討するにあたり、既存のステップアップ研修受講者がチームオレンジの担い手となっていただけるように、再度チームオレンジの内容を加えた研修を実施し、受講者の中でチームオレンジの参加を希望された方にオレンジサポーターとして登録いただくこととなった。そして、2021年4月に「個別活動」からチームオレンジの活動を開始した。
- ・活動が進むにあたり、認知症の普及啓発や医療機関との連携をチームオレンジで行うことができないか、認知症地域支援推進員と行政で検討した結果、3つのプロジェクトを立ち上げるようになった。
- ・関係機関との調整は認知症地域支援推進員を中心に進め、オレンジサポーターには関心のあるプロジェクトに参加していただいた。各プロジェクトメンバーと認知症地域支援推進員で活動内容を検討し、順次活動を開始していった。

【現在】

- ・プロジェクトごとにオレンジサポーター同士がSNSでつながっており、連絡はSNSを通して行っている。（SNSを利用できない方は電話で別途連絡。）プロジェクトの掛け持ちも可能で、複数のプロジェクトで活躍するオレンジサポーターもいる。
- ・今後も必要に応じてプロジェクトを立ち上げ、広くオレンジサポーターや認知症の当事者が活躍できるまちづくりを推進し、様々な機関を巻き込みながら、市全域で体制を整備していければと考えている。
- ・おいでんサロンに参加する手芸が得意なオレンジサポーターを中心に令和6年度より認知症マップを作成し、医療機関や介護事業所へ配布し活用している。

4. 活動内容

①個別活動

- ・認知症当事者の方の「やりたいこと・やってみたいこと（趣味活動等）」とオレンジサポーターの「できること」をマッチングし、個別活動をしている。2025年8月時点で、相談が22件あり、延べ16件マッチングがされた。

・ Aさんの事例

＊ Aさんはご家族とお住まいの80代の女性。

＊ Aさんは毎日ひとり歩きをしており、途中で転んで救急車で運ばれたりすることもあったため、家族は心配していた。しかし、Aさんは以前大病をしており、家族以外の方との交流もなく、「身体が弱ると家族に迷惑をかけるから」という理由で、一生懸命歩いていることがわかった。

＊そこで、Aさんの家から一番近いオレンジサポーターのBさんに依頼し、Aさんの家を訪問しておしゃべりをしたり、一緒に散歩に行っていたりした。Aさんも「年の近い友人ができた」と喜んでいただいた。



◀AさんとオレンジサポーターのBさん

・ Cさんの事例

＊ Cさんはご家族とお住いの80代の男性。

＊ Cさんは免許返納後、趣味の畑に行けなくなったことで閉じこもるようになり、テレビを見てばかりの生活になっていた。その姿を見て家族が心配し「おれんじドア・セと※」に参加された。「おれんじドア・セと」の中で、Cさんは囲碁が好きだということが分かり、他の参加者と一緒に囲碁対局をすることとなった。しかし、対戦していた参加者が引っ越すことになり、一緒に囲碁ができる人がいなくなってしまった。

＊そこで、オレンジサポーターに相談し、囲碁のルールを知っているDさんが、週に1回、Cさん宅を訪問して囲碁対局をすることになった。この活動をきっかけに、Cさんは朝も決まった時間に起き、カレンダーで予定を確認するようになり、とても元気になった。

※おれんじドア・セと：瀬戸市で実施している認知症当事者同士の交流会

②出張！せとらカフェ♪

- ・ 2022年4月から月に1回、各地域（交流センター、公民館、スーパー、薬局等）で認知症に関する講座や認知症クイズ、コグニサイズ、瀬戸の情熱（口腔ストレッチ）等、認知症の普及啓発を行っている。



アピタ瀬戸店▲



下品野地域交流センター▲



日本調剤瀬戸薬局▲



バロー新瀬戸店▲

③おいでんサロン

- ・医療機関を訪れる人や診断を受けた方の相談対応を目的に、2022年3月23日に瀬戸みどりのまち病院のコミュニティーセンターにオープンした。
- ・毎月第2・4水曜日に開催しており、介護予防教室や人生会議等の専門職による講座の他に、川柳、ハンドマッサージ等、オレンジサポーターが講師となり、特技を活かした講座も実施している。また、認知症に関する相談も随時受け付けている。



「人生会議ってなに？」▲



「ハンドマッサージ教室」▲



◀ 「川柳を体験してみよう」



オレンジサポーターとおいでんサロンの参加者▲

④オレンジガーデニング

- ・毎年9月の認知症月間に向けて、認知症の啓発カラーであるオレンジ色の花を市内各所に咲かせる活動を行っている。
- ・2024年度はキバナコスモスの花の種を市民に配布し、市内各所で9月の認知症月間に花を咲かせた。また、咲いた花はオレンジサポーターが押し花にして、しおりを作成。認知症月間に認知症書籍コーナーの開設にご協力いただく書店（2店舗）にて、書籍を購入された方へプレゼントしていただいた。
- また、デイサービスにてオレンジサポーターと利用者がしおりを作成し、プレゼントした。
- ・咲いた花から種を収穫し、来年度の活動につなげていく。



キバナコスモスの種の袋詰め▲



作成したしおり▲

瀬戸市社会福祉協議会で咲いた
キバナコスモス▶



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【活動を進めていく上での工夫（個別支援）】

- ・本市のチームオレンジは「個別活動」から始めており、本活動が「介護サービス」にならないことに注意し、「認知症当事者のやりたいこと（趣味活動等）」に目を向け、活動することとした。活動にあたって、事前に認知症当事者とオレンジサポーターの面談を行ったり、活動が軌道に乗るまでは認知症地域支援推進員が同行している。
- ・活動当初は実施方法や周知を模索していたが、対応しながら問題点を確認し、検討していった。また、周知に関しては地道に広報するとともに、オレンジサポーターや報道機関にもご協力いただいた。
- ・また、万が一の時のために市民活動災害補償制度で対応できるようにしている。

【活動を進めていく上での工夫（出張！せとらカフェ♪）】

- ・既存のせとらカフェは開催場所が固定されており、実施できていない地域があることから、「出張！せとらカフェ♪」として、各地域で認知症の普及啓発ができるように実施している。
- ・公民館や交流センターにとどまらず、地域のスーパーや薬局にもご協力いただき開催している。参加者からは「参加したかったけれど移動手段がなくて、今まで集まりに行けなかった。自分の住んでいる地域でやっていただけると参加できてありがたい。」という声もいただき、開催場所を変えて実施している。

【活動を進めていく上での工夫（おいでんサロン）】

- ・活動当初に、オレンジサポーターと認知症地域支援推進員、行政でどのように進めていくか検討しており、現在のように開催することとなった。
- ・また、おいでんサロンはオレンジサポーターのスキルアップも目的の一つとしており、外部講師を招いたり、時にはオレンジサポーター自身が講師になったりして、講座開催をしている。

【活動を進めていく上での工夫（オレンジガーデニング）】

- ・若年性認知症当事者の想いを基に畑や花壇整備を行っている「せとらカフェやすらぎ」と協働し、活動を進めている。
- ・また、せとらカフェやすらぎに参加している方にもチームオレンジに参加いただいております、連携を密にしながら各事業を進めている。

【サポーターへの働きかけ】

- ・オレンジサポーターとともに検討しながら各プロジェクトを進めており、今後は自発的にオレンジサポーターが活動できるように整備を進めていく。
- ・また、ステップアップ研修の後には、オレンジサポーター交流会を実施し、新たなメンバーとの顔合わせや勉強会、意見交換等を行っている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ研修の開催する頻度や対象者について>

- ・開催頻度：地域の認知症サポーター養成講座の実施状況に合わせて開催
2024年度は1回開催（2025年2月1日・5日）
- ・対象者：認知症サポーター養成講座を受講した者
- ・内容（2024年度開催）
 - 1日目 藤田 和子氏による講演（認知症フォーラム）
 - 2日目 講座① 認知症について（接し方・意思決定支援）
講座② 認知症施策について（チームオレンジ等）

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・瀬戸市役所内で実施される「せと福祉マルシェ」に認知症当事者とその家族にも参加していただき、認知症の普及啓発に尽力いただいている。
- ・また、「個別活動」では、認知症当事者の方のやりたいこと（趣味活動）を聞き取り、オレンジサポーターとマッチングしており、2025年8月時点で、16件の活動が行われた。
- ・本市の活動は当事者が参画できるよう、相談いただいた方だけではなく、他の事業（おれんじドア・せと等）でかわりのある認知症当事者で興味がある方にもお声がけしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・「おいでんサロン」や「出張！せとらカフェ♪」では、参加者の中で相談を希望される方がいれば随時対応している。
- ・また、おれんじ・ドアや認知症介護家族交流会での困りごとの把握に加え、地域包括支援センターや居宅支援事業所等関係機関へはICTツールを活用し、連携、発信している。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・活動当初から全ての事業展開を考えていたわけではなく、実施してみて次回どうするか検討しようと考えていた。実際に活動が始まり、オレンジサポーターの熱意や力を借りながら、次々と事業を展開していくことができた。
- ・活動を進めていくことで、認知症の普及啓発が十分でなかったことを痛感した。チームオレンジがスタートし、認知症普及啓発にも市民の方が介入いただけることで、行政になかった視点で活動を進めていけているのではないかと感じている。
- ・また、本活動は様々な機関と連携するきっかけづくりにもなっており、今後も市民や企業、専門職への理解を促進していく。

<課題>

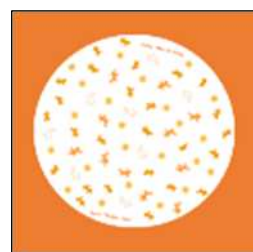
- ・ オレンジサポーターが中心となって実施していただくことができるように、体制整備を進めることが必要だと感じている。
- ・ また、医療機関との連携が不十分であるため、診断直後の対応や受診先からの紹介をいただけるように連携体制を構築していきたいと考えている。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 今後もオレンジサポーター、認知症地域支援推進員、行政はフラットな関係で協働していきたい。また、体制整備をする中で、オレンジサポーターのモチベーションを保てるように注力していく。
- ・ 現在の活動が口コミとして市内各所に広がり、市民が「認知症になっても安心してらせるまち」だと思えるまちにしていきたい。

9. ここがポイント！

- ★トップダウンではなく、オレンジサポーター、認知症地域支援推進員、行政等の関係者で検討しながら各プロジェクトを進めています。
- ★また、当事者の想いに寄り添うとともに、オレンジサポーター自身も楽しみながら活動しています。
- ★オレンジサポーターグッズとしてバンダナを作成し、活動時に着用いただいています。関係者が同じものを身に着けることで、一体感が生まれ、士気の向上につながることを期待しています。



オレンジサポーターグッズ
のバンダナ▲
◀オレンジサポーターの方たち

<愛知県から>

- ・ オレンジ色の花を市内各所に咲かせるオレンジガーデニングは、視覚的に華やかで通行人の興味を惹きやすい魅力的な取組だと感じました。
- ・ 市内各所において認知症の講座などを開催されており、より広く多くの方が参加できるよう工夫されている印象を受けました。

チームオレンジ取組事例【豊川市】

【チーム名】（チームオレンジとよかわ）

【タイトル】（自分がしたい暮らしを最後まで安心してできるまち）

1. 自治体情報（2025年4月1日現在）

（1）人口	185,441人
（2）高齢者人口	49,216人
（3）高齢化率	26.54%
（4）面積	160.6km ²
（5）日常生活圏域	4圏域
（6）地域包括支援センター数	4か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2024年2月開始
（2）活動実施主体	市町村、地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	啓発活動、イベント企画会、イベント開催
（4）活動頻度	不定期
（5）利用料金	なし
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、認知症地域支援推進員
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：約100人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 認知症サポーター（87名、認知症サポーター養成講座を受講し、その後ステップアップ研修を受講した者のうち、活動者登録を希望した者）、認知症当事者や家族、認知症地域支援推進員、市役所職員、チームオレンジコーディネーター
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- 2020年度から「認知症サポーターステップアップ講座」を開始
 - ・ステップアップ講座でサポーター活動登録者を募る。
- 2023年9月「認知症講演会」にて出張版の認知症カフェ（名称：オレンジフラワーカフェ）を実施
 - ・認知症当事者や家族・認知症地域支援推進員・認知症サポーターが参加する。
 - ・「認知症当事者のやりたいこと」を聞き取り、「運動がしたい」、「美味しいものが食べたい」という声が多くあり。
- 2024年2月「チームオレンジとよかわ」の設置
 - ・2024年2月時点で認知症サポーター登録者数46名。
- 2024年2月「とよかわオレンジウォーキング」開催
 - ・「認知症当事者のやりたいこと」の「運動がしたい」を実現。
- 2024年4月チームオレンジコーディネーターを専属で1名配置する。
- 2024年4月「チームオレンジ企画会」を開催
- 2024年6月「おむすびの会」実施
 - ・「認知症当事者のやりたいこと」の「美味しいものが食べたい」を実現。
- 2024年9月・11月小学校へチームオレンジとよかわとして認知症サポーター養成講座を実施。
 - ・サポーターによる寸劇、当事者の話を伝える
- 2024年10月「秋の散策」実施
 - ・「運動がしたい」を実現
- 2025年2月「うたのわ」を実施
 - ・「カラオケがしたい」を実現
- 2025年6月本人ミーティング・家族交流会を実施。
- 2025年8月「チームオレンジ夏祭り」を実施
 - ・「盆踊りがしたい」「運動会みたいのものがしたい」を実現

4. 活動内容

- 認知症サポーター養成講座・認知症サポーターステップアップ講座の実施
- ・広く啓発するため、認知症地域支援推進員、市職員、地域包括支援センター等のキャラバンメイトが市民、民生委員、学校関係、企業等で実施。
- 認知症サポーター活動登録者の認知症カフェへの参加支援
 - ・認知症サポーターの活動への動機づけのため、認知症カフェと認知症サポーターのボランティア従事を目的としたマッチング会を実施。
- 定期的に「チームオレンジ企画会」を開催
 - ・認知症サポーターと共に認知症地域支援推進員、市職員で企画から一緒に創り上げる。
 - ・認知症当事者の声から、どんなイベントを開催するか話し合う。
- 不定期にイベントを開催

①とよかわオレンジウォーキング

- ・「運動がしたい」という認知症当事者の声から実施。
- ・認知症当事者や家族、認知症サポーター等26名が参加し、ショッピングモール内を自分のペースで歩く。

②おむすびの会

- ・「美味しいものが食べたい」という認知症当事者の声から実施。
- ・みんなでお米を炊いて、塩おむすびを握って食べるもの。
- ・人と人をつなぐ結びの意味もこめて、「おむすびの会」というイベント名で開催。



<当事者の方にお米に最初に空気を入れてもらう> <いただきますをみんなで一緒に>

③秋の散策

- ・「運動がしたい」「出かけたい」という認知症当事者の声から、公園を散策。
- ・散策後にお茶をしながら次は「歌が歌いたいね」という話が出る。



<お魚を見て回りました>

<散策後は、お茶タイム>

④うたのわ

- ・「歌が歌いたい」という声から、カラオケを実施。踊ったり、ブンネという楽器を演奏する。



<みんなで歌を歌いました>

⑤チームオレンジ夏祭り

- ・「盆踊りがしたい」「運動会のようなものがしたい」という声から、両方ともできる夏祭りを開催。



<盆踊りを全員で>

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・市職員とチームオレンジコーディネーター、認知症地域支援推進員で常に情報共有ができるように、連絡会を月1回実施することにより、企画会の事前打ち合わせや今後の活動について話し合う場を設けている。常に連絡が取りやすいように電子連絡帳を利用し、すぐに確認しあえるように体制を整えている。
- ・イベントの活動の内容を決定するにあたって、認知症サポーターが最初の企画から一緒に考えることにより、自分たちで創り上げたという喜びや達成感を共に感じられるように企画会を実施している。
- ・認知症当事者の声を聞く「本人ミーティング」の場を大切にして、活動に活かしている。
- ・認知症地域支援推進員が個別で認知症当事者および家族と繋がり、イベントなどの情報を提供しやすくしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

■開催頻度

- ・年2回は定期開催。
- ・出前講座でも受け付けているため、回数は要望によって変動あり。

■対象者

- ・認知症サポーター養成講座受講者

<認知症の人本人への働きかけについて>

認知症地域支援推進員が各圏域の担当者と繋がっている認知症当事者に対して、イベントの案内を出したり、普段から関わりを持つようにしている。また、市民病院の認知症サポートチームと連携し、当事者が繋がれるように取り組む。当事者が声を出しやすい雰囲気を作れるように工夫している。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

認知症地域支援推進員が把握している認知症当事者へ、本人や家族の困りごとを聞ける関係性をもつ。またイベント時に認知症当事者や家族が参加した際に、アンケート等で把握する。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ 認知症当事者も家族も認知症サポーターも全員で笑顔になれる楽しい場所となり、「役割があって楽しかった」「素敵な時間を過ごせた」などの意見が見られ、「共生社会の実現」に近づいたように思う。
- ・ 企画から認知症サポーターと一緒に考えることで、やりがいや楽しさ、達成感を感じることができ、認知症サポーター自身の成長や勉強となっている。

<課題>

- ・ 認知症当事者の参加が少ない。
- ・ 参加人数を増やしたときに集団行動となるため、環境のざわつきにより1人1人に声が届きにくくなったり、配慮の目が届きにくくなるため、環境の調整が必要である。
- ・ 参加者の目的地までの移動方法の確保。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 今後も企画会を通して、全員が楽しむことができ、笑顔になれるイベントを実施していきたい。
- ・ 認知症の方が増える中、子ども世代で一度は認知症サポーター養成講座を受けられる場をつくり、やさしいまちにしていきたい。
- ・ 外出しやすいまちづくりのため、企業へ向けた認知症サポーター養成講座にも力を入れていきたい。

9. ここがポイント！

- ・ 認知症サポーター、認知症地域支援推進員、市職員等で企画をみんなで考えながら実施しています。
- ・ 認知症当事者や家族の想いを大切に、認知症サポーター自身が楽しく生きがいを感じられるように活動していきます。
- ・ 1人1人が楽しむことができ、笑顔になれる場をつくっていきたいです！

<愛知県から>

- ・ 認知症の人のご希望に耳を傾け、実際に様々なイベントを実施されているところから、ご本人のお声やお気持ちを大事にされている印象を受けました。
- ・ チームメンバー間で構築された綿密な連携体制は、イベントの企画や認知症の人への働きかけなどで活かされています。



チームオレンジ取組事例【碧南市】

【チーム名】（オレンジファミリー碧（みどり））

【タイトル】（オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う「交流拠点」）

1. 自治体情報（2025年7月1日現在）

（1）人口	72,045人
（2）高齢者人口	17,423人
（3）高齢化率	24.1%
（4）面積	36.12km ²
（5）日常生活圏域	6圏域
（6）地域包括支援センター数	3か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年5月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター
（3）活動内容	交流会（認知症本人の希望を叶える取組）
（4）活動頻度	月1回
（5）利用料金	無料（内容により実費徴収あり）
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、グループホーム 碧南市キャラバンメイト連絡会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：20人 <以下、チームを構成する属性> ・オレンジサポーター（認知症サポーター） ・認知症の本人、家族 ・地域包括支援センター職員（認知症地域支援推進員） ・認知症介護指導者（グループホーム管理者）、 ・市職員（認知症地域支援推進員）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市職員（保健師・認知症地域支援推進員）
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

認知症サポーターの養成は2006年度から開始し、サポーター数は7,427人（2025年9月末）。認知症サポーターの活動促進のため、オレンジサポーター（地域の認知症の人やその家族の地域生活を見守り支援するための活動に意思がある方）登録制度を2019年7月から開始し、登録者は293人（2025年9月末）。

- ・ オレンジサポーターの登録制度を開始した当初は、活躍の場は認知症カフェ1か所しかなく、そのカフェもコロナの影響により活動休止（2020年2月休止、2023年8月再開）となっていた。
- ・ 認知症高齢者等が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる地域をつくるために、チームオレンジ構築を視野に入れ、認知症サポーターステップアップ研修を受講された方を対象に「オレンジサポーター交流会」の開催を案内し、2021年5月から交流会を開始。地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）、認知症介護指導者（グループホーム管理者）の協力を得て、月に1回、オレンジサポーターが集い、認知症について語り合い、具体的な活動等について話し合いを重ねた。
- ・ 交流会にサポーターの一人が家族である認知症の本人も連れて参加。認知症の本人も話し合いに加わり、回を重ねる中でメンバーは「自分たちが〇〇したいばかりではなく、本人の意見、想いを聞くことが大切である」と気付く。また、話し合いの中で「ともに楽しむこと」「繋がること」「やってみること」のキーワードが出され、その初めの一歩として、本人のしたい「ハーモニカ演奏」「グランドゴルフ」を実現する方法を考えていくことから開始することとした。活動にあたりチームオレンジコーディネーター（市職員）から「チームオレンジ」の目的や役割をメンバーに説明し、方向性を同じくした。
- ・ 7回目の交流会で「本人のやりたいこと「ハーモニカ演奏」を実現しよう 初めの一歩 “音楽で繋がろう、楽しもう♪”」を開催。同時にオレンジサポーター交流会として始まったこの会をオレンジサポーター、認知症の本人、家族などが仲間として集う“交流拠点”としてスタート。2022年度に名称を「オレンジファミリー碧」と決め、メンバーがチラシを作成し周知活動を開始。広報へきなん令和6年9月号の認知症特集では「認知症の人と一緒にみんなで楽しむ様子」を発信した。その後も活動を継続し、認知症本人や家族の想いを実現することで地域とのつながりをつくることを一歩ずつすすめている。
- ・ 令和7年度より、碧南南部地域包括支援センターが認知症機能強化型地域包括支援センターとなり、チームオレンジ活動実施主体として活動中。

4. 活動内容

・月1回、第1金曜日に集い、意見交換し本人や家族の想いを叶える取組を行っている。

・主な活動

*本人のやりたいこと・やってみたいこと

歌、パタボード、グランドゴルフ、盆踊り、押し寿司づくり、寺社巡り、工場見学等

一緒に話したり、お話しする仲間が集まる場所です。
私たちと一緒に活動してみませんか？

交流拠点 **みどり**
オレンジファミリー

オレンジサポーター・認知症の本人・ご家族などが
仲間として集う「交流拠点」です！

日 時：第1金曜日 13時30分～15時
※祝日の場合は第2金曜日

場 所：豊南市内施設
大浜まちかどサロンなど

参加者：オレンジサポーター、認知症の本人、ご家族など

内 容：本人の「したいこと・困り事」など、思いを大切に、「私たちにできること」を話し合い、それに向けて活動中
＜数回にわたる内容の転換があります＞

「オレンジサポーター」とは・・・
認知症サポーターのうち、積極的に認知症の人やその家族への支援をしたいと考える人のことです。
一緒に活動する仲間を募集中です！

問合せ：豊南市内施設介護福祉課 電話（0556）25-2820
作成：交流拠点「オレンジファミリー」

交流拠点「オレンジファミリー（みどり）」

日時：第1金曜日 午後1時30分～3時 ※印は第2金曜日

場所：豊南市内施設 大浜まちかどサロン（中町2-105） など

開催日	場 所	内 容
令和7年 4月 4日（金）	明石公園	お花見
5月 2日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	話し合い
6月 6日（金）	晴：畑ヶ瀬 雨：無我苑	油ヶ瀬散策
7月 4日（金）	調整中	Café へ行こう
8月 1日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	盆踊り
9月 5日（金）	碧南海浜水族館	水族館散策
10月 3日（金）	大浜公民館 調理室	押し寿司を作ろう
11月 7日（金）	晴：沢渡公園グランド 雨：大浜まちかどサロン	グランドゴルフ
12月 5日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	笑いヨガ
令和8年※1月 9日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	検討中
2月 6日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	検討中
3月 6日（金）	大浜まちかどサロン 多目的ホール	振り返り

持ち物：お茶、お水など水分補給できるもの

交流拠点
「オレンジファミリー」



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・交流会では毎回、参加者の声を聴き、意見交換をする時間を設けている。
- ・活動内容は繋がること、楽しむことを意識。地域の盆踊りグループや寺社、企業との交流、伝統料理作りを取り入れるなどの工夫をしている。
- ・認知症に関する他の事業や、関係者との連携。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・年に1回（2回コース）の開催を継続。
- ・認知症サポーター養成講座受講者に広報、LINEにて周知。
- ・オレンジサポーター登録者に個人通知。
- ・「オレンジファミリー碧」の参加者で受講していない方へ案内。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・「オレンジファミリー碧」で本人の意見、想いを聴く。
- ・「オレンジファミリー碧」に継続参加できるよう、欠席の際は状況確認を行う。
- ・相談場面や他の事業等においても本人の想い、ニーズを聴くことを意識して対応。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・「オレンジファミリー碧」で本人、家族の想いを聴き取る。
- ・他の認知症関係の事業（認知症家族のつどい・本人交流会等）で想いを聴き取る。
- ・認知症に関する相談を受けた際に把握（様式をつくり整理、課題を把握）。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症本人の想いを大切にしたい話し合い、活動が展開されている。
- ・本人の希望を叶える取組を通じ地域資源の繋がりができ、活動に広がりが出てきている。
- ・チーム員自ら、オレンジファミリー碧の活動を周知し、仲間づくりに努めている。
- ・本人、家族の望みが叶った姿、変化を目の当たりにし、チームオレンジの取組の必要性を感じられたこと。

<課題>

- ・認知症本人、家族のニーズの把握。
- ・認知症の人と家族の困りごとの早期から継続した支援。
- ・認知症本人がチームの一員として参加すること（認知症の人の社会参加）。
- ・地域の企業や事業者への周知、連携体制の構築。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 認知症本人も、家族も安心できる仲間と活動ができること。
- ・ 認知症の人と家族などが、いつでも訪れたりできる普段からのより所となること。
- ・ 支援する人、される人の関係を超えて、お互い様の活動となること。
- ・ 認知症であることを本人・家族が気軽に言うことができ、「大丈夫だよ」と受けとめて地域で支え合うことができる、そのような暮らしができる地域ができること。

9. ここがポイント！

- ・ 「オレンジファミリー碧」は、オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う交流拠点。
- ・ 本人も家族も安心した仲間と活動する「家族のように」の想いを名称に込め、常に、認知症の本人・家族の「したいこと・困りごと」などの想いを大切に、「私たちにできること」を話し合い、それに向けて活動しています！

<愛知県から>

- ・ 交流会というリラックスしやすい場所で意見交換することで、認知症のご本人やご家族のお気持ちなどを引き出しやすいように工夫されている印象を受けました。
- ・ チームメンバーへステップアップ講座の積極的な受講を促しており、チーム全体の能力のさらなる向上が図られています。



チームオレンジ取組事例【刈谷市】
【チーム名】（チームオレンジかりや）
【タイトル】（認知症にやさしい街づくり）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）	
（1）人口	153,091人
（2）高齢者人口	31,909人
（3）高齢化率	20.8%
（4）面積	50.39km ²
（5）日常生活圏域	3圏域
（6）地域包括支援センター数	6か所（基幹型センターを除く）

2. 活動の概要	
（1）活動開始時期	2024年6月開始
（2）活動実施主体	市町村、地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	認知症関連事業への支援、認知症カフェの運営や参加、高齢者サロンの運営、啓発イベントへのスタッフ参加（検索模擬訓練スタッフ、認知症サポーター養成講座スタッフ、啓発物品づくり）など
（4）活動頻度	月1回程度 ※認知症関連事業の支援は随時
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	必要な物資等は市などから提供
（7）連携する機関等	市役所、地域包括支援センター、社会福祉協議会、刈谷市民ボランティア活動センター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：25人 <以下、チームを構成する属性> 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【課題と状況】

2015年度から認知症地域支援推進員が認知症カフェ開設・運営のサポートや、ボランティアとともにステップアップ講座の企画開催、高齢者徘徊模擬訓練、等を実施してきました。2018年度には認知症カフェ主催者交流会（認知症カフェ10か所）を開催、ボランティア主体で活動できる場づくりを計画し段階的に実施してきましたが、コロナ禍となって活動が停滞してしまいました。2023年度から活動を再開していますが、再開可能な認知症カフェが半分以上へと減ってしまいました。

【問題意識】

- ・市内にはさまざまなボランティアが数多く活動していて、各々が自分のスタイルで活動しています。認知症を正しく理解し、認知症の方を支えるまちづくりの協力者としてお互いに併走できる関係をつくり、保っていくことができる仕組みが必要と考えました。
- ・既存の活動を保ちながら、認知症に関する取り組みへと協働を図れることが重要と考えました。（講座やイベントなど啓発活動への協力、認知症カフェのスタッフ募集、等）

【きっかけ】

認知症カフェを運営しているボランティア団体より「人材不足」という相談を受けて、市内の活動状況を再調査しました。認知症サポーター養成講座受講後の学びの機会が少ないという声から勉強会を企画しました。勉強会参加者の声を拾いながら活動へとつながっていく仕組みづくりを行いました。

地域をサポートしている認知症地域支援推進員が月1回の定例会議で、地域で活動されている方々の声（本人の声、家族の声、ボランティアの声、支援者の声）を共有し、状況にあった仕組みについて検討を重ねました。

4. 活動内容

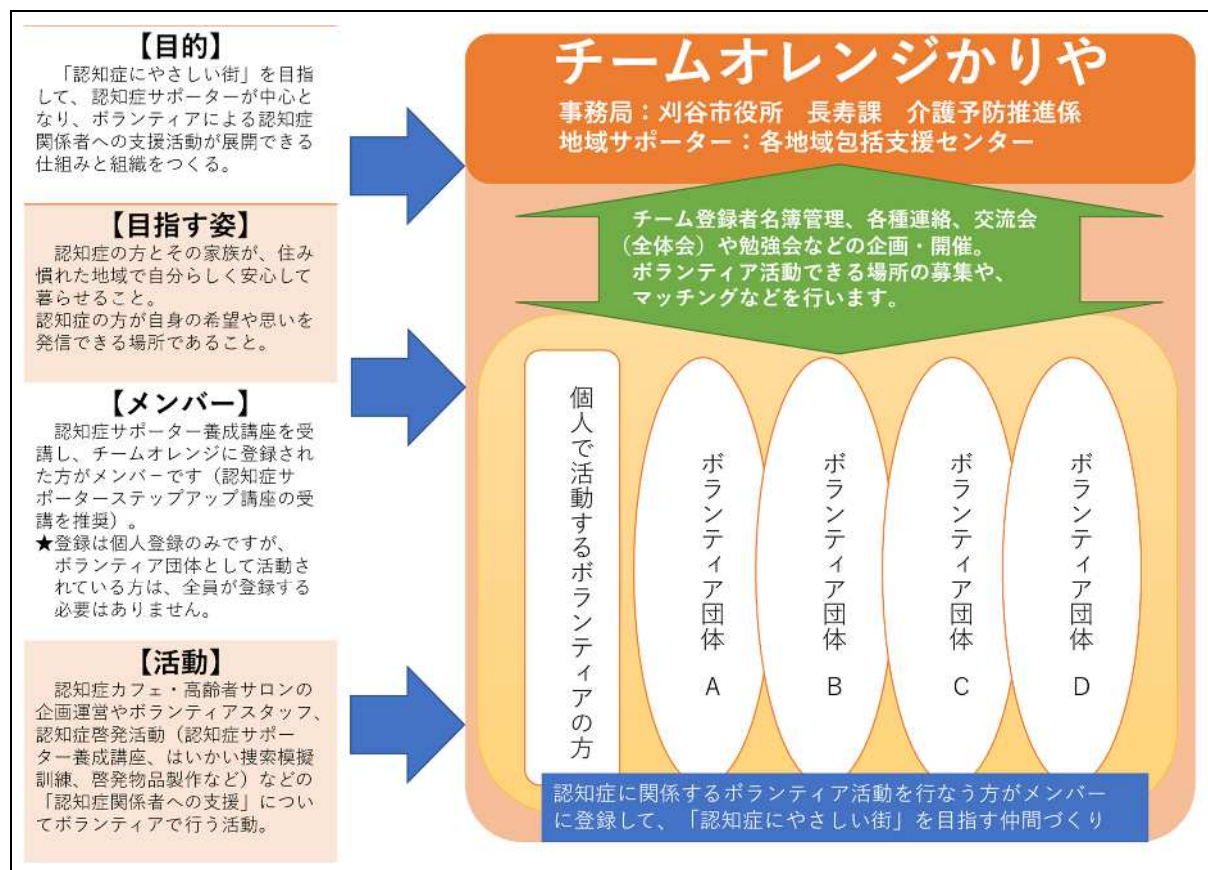
2023年度 認知症サポーター向けの勉強会を実施（年4回）

2024年度 認知症サポーター向け勉強会に参加された方を中心にメンバーを募り、組織化を図る（「チームオレンジかりや」の設置）

⇒LINEオープンチャットへの登録によるメンバー管理と情報発信

- ・認知症サポーター向け勉強会やステップアップ講座への参加・運営協力
- ・ロバ隊長のバルーンづくり（バルーンアートボランティアとの協働）
- ・搜索模擬訓練へのスタッフ参加
- ・刈谷市認知症サポート事業所登録制度開始

2025年度 チームオレンジメンバー交流会の実施



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

認知症サポーター養成講座を受講した方が、その後も継続して認知症への学びを深めたいと思ったときに、年1回のステップアップ講座だけでは機会が少ないのではないか？時間が空いてしまうと興味が薄れてしまうのではないか？と捉えて、参加しやすい勉強会の開催からスタートしました。すでにボランティアとして活動されている方も、ボランティアに興味がない方も、誰もが認知症について学ぶ機会を設けることで、参加者の横のつながりと情報交換・意見交換の場として環境づくりを行いました。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

2016年度から年1回開催。対象は認知症サポーター養成講座受講済の方。地域住民だけでなく市内就労者など当初からファシリテーターにボランティアを招き、企画段階からボランティアと協働してグループワークを実施しています（2025年度以降、ボランティアは会場スタッフのみとなりました）。

<認知症の人本人への働きかけについて>

認知症地域支援推進員（地域包括支援センター職員）が地域で捉えた本人の声を、認知症関連事業へと反映し、本人が地域で活動できる場・居場所づくりとして認知症カフェや高齢者サロンへ関わっています。

<認知症の本人やその家族の困りごとの把握について>

身近に相談出来る場所として、認知症地域支援推進員と認知症初期集中支援チームを地域包括支援センターへ設置し、相談体制が確保できるように配慮しています。

家族者交流会や本人交流会などであがった声や、認知症関連事業等へ参加された際の声（ご意見）を抽出・把握して地域支援活動に反映しています。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

すでにさまざまな活動をされている方が地域に多数内在している状況からのスタートとなりました。LINEオープンチャットを活用してグルーピングすることで、お互いにかかわりが少なかったメンバー同士が情報の共有と連絡体制の確保が容易となりました。すでにボランティア活動をしていた方同士は、お互いの活動を知ることにより知識を深めることにつながり、ネットワークの素地として活動の土台となりました。

<課題>

チーム内へ発信しやすい環境（LINEオープンチャット）は整っていますが、各メンバーの活動状況を定期発信していくところまで出来ていないのが現状です。チーム内外へのわかりやすい情報発信の方法をチームメンバーと検討していくことが課題です。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

現状ではチームとして組織化されたばかりで同じ方向に向かって進み始めたところです。認知症カフェ・高齢者サロン・傾聴ボランティア・防災ボランティアなど、チームメンバーが違うボランティア団体に所属してベースの活動を持ちながら「チームオレンジかりや」へ参加しています。ネットワークの拡大と強化を図ることで「チームオレンジかりや」の取り組みを深め、活動を通じたつながりの中で認知症の本人がチームに参画し活動する機会を増やせることを期待しています。

9. ここがポイント！

成長過程にあるチームオレンジかりやですが、チームメンバーはボランティア歴の長い方が多く、地域のつながりをたくさん持っているメンバーで構成されています。

認知症の方と関わりを持っていらっしゃる方も多く、多彩なチームメンバーがお互いのバックグラウンドを活用して声を掛け合いながら活動しているチームです。

<愛知県から>

- ・ 認知症サポーター向けの勉強会に参加された方を中心にチームメンバーを募られたことから、チームオレンジの活動に意欲的な方が多いように思います。
- ・ 昨年チームオレンジを立ち上げられたということで、さらなる発展と継続的な活動に期待しています。

チームオレンジ取組事例【安城市】

【チーム名】（チームオレンジあんじょう）

【タイトル】（認知症理解を市や地域で推進するために活動しています）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	187,661人
（2）高齢者人口	41,716人
（3）高齢化率	22.23%
（4）面積	86.05km ²
（5）日常生活圏域	8圏域
（6）地域包括支援センター数	8か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年3月開始
（2）活動実施主体	市町村
（3）活動内容	住民主体の認知症ボランティア活動、認知症を含む高齢者の地域支援活動
（4）活動頻度	不定期
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市が直営
（7）連携する機関等	各地区の生活支援コーディネーター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：95人 ＜以下、チームを構成する属性＞ チームオレンジコーディネーター（1名）、生活支援コーディネーター（16名）、登録サポーター（2025年6月現在78名、ステップアップ講座受講生のうち情報提供同意者）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市職員
（10）チームオレンジの類型※	地域の状況により第1～3類型を選択予定

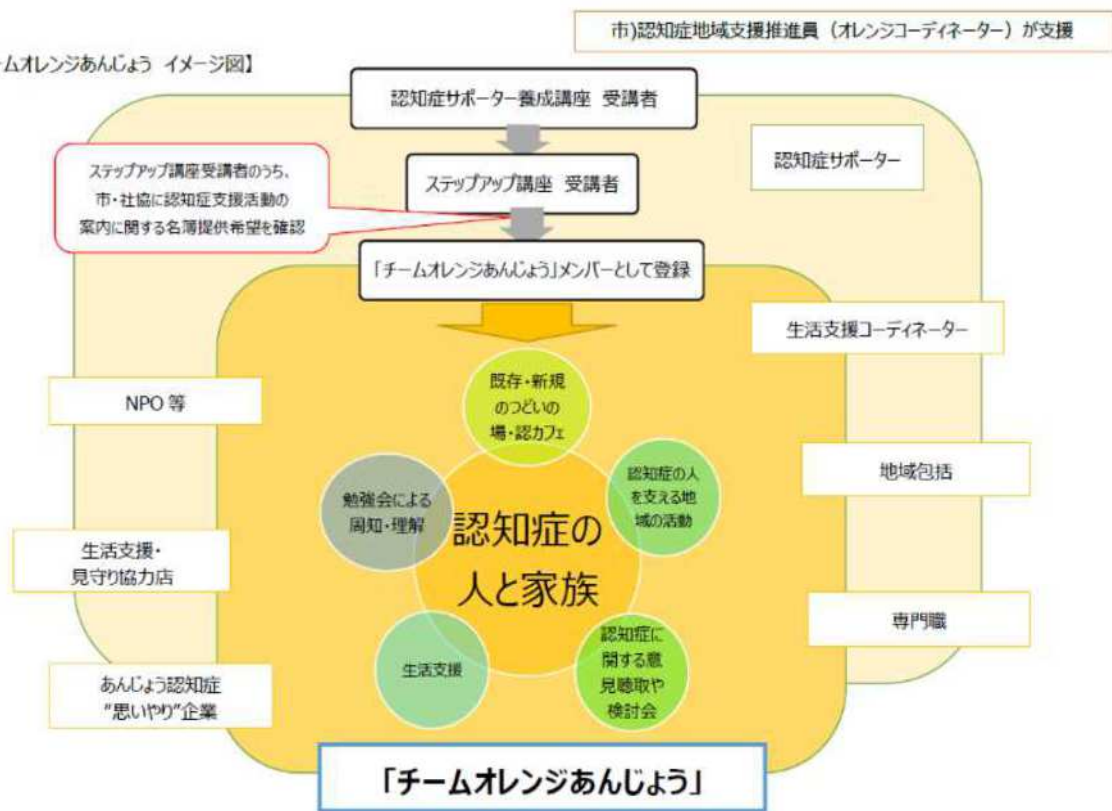
3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・ 2017年度から「認知症サポーターステップアップ講座」を市主催で開始。
- ・ 行方不明高齢者声掛け搜索模擬訓練への参加
2018年度に市民を対象に行方不明高齢者搜索模擬訓練を実施。その際、運営の手伝いとして認知症サポーターが参加。
- ・ 認知症カフェ及び若年性認知症イベントへの参加
2017年度は市内複数の認知症カフェに参加。
2019年度に若年性認知症に関する市民イベントに運営スタッフとして参加。また、若年性認知症本人と支援者の座談会や認知症カフェへ参加し、支援を実施。
- ・ 認知症サポーターステップアップ講座受講生のうち、認知症ボランティアや高齢者の支援に関心のある市民を2017年から登録。（これらを以下「登録者」という。）
- ・ 日常生活圏域ごとに地域に根差した活動を行う地区社会福祉協議会の担当者が生活支援コーディネーターを兼務していることから、登録者名簿の活用を地域ごとに依頼。
- ・ 2019年から生活支援コーディネーターとステップアップ講座を協働で企画・開催することで、講座参加者と顔の見える関係を作り、登録者の地域での活動がスムーズに行われるよう努めている。
- ・ 2021年度に生活支援コーディネーターが認知症地域支援推進員研修を受講し、地域での認知症支援に関する活動への理解を深めることで、登録者の活用を促進する取り組みを開始。
- ・ 2022年度から、ネットワーク会議に登録者に参加してもらい、認知症啓発について話し合う機会を持った。2023年度からは、登録者にも参加協力してもらい、認知症啓発イベントを行っている。
- ・ 2024年度からは、市全体での認知症啓発だけでなく、登録者が居住地域で活動できる取り組みを、各地区の生活支援コーディネーターとともに検討中である。

4. 活動内容

【チームオレンジあんじょうのイメージ図】

【01 チームオレンジあんじょう イメージ図】



※今後、新規・既存に関わらず、認知症と共に歩むことを意識している様々な活動を、安城市の「チームオレンジ」登録に向けて検討する

- ・生活支援コーディネーターによる活動参加の案内や調整により、認知症カフェや高齢者サロンなどへの参加につなげる。
- ・2022年には、担い手としての活動や認知症高齢者などの見守り等に関する支援を話し合う会議への参加につながった。
- ・2023年からは、市の認知症啓発イベントにチームオレンジが内容を検討する会議から参加協力している。

(右；認知症啓発イベント
「おれんじフェスタ2024」
の様子。)



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・地域に根差した活動がしやすいように、各福祉センターに配属されている生活支援コーディネーター16名にチームオレンジあんじょうのメンバーを支える構成員としてご協力いただいている。
- ・認知症サポーターステップアップ講座後、地域での活動にスムーズに参加できるよう、また顔の見える関係が築きやすいよう、各地区の生活支援コーディネーターにも開催協力や見学という形での参加の声掛けを行っている。
- ・認知症ステップアップ講座内でチームオレンジ及びチームオレンジあんじょうの説明を実施し、登録への働きかけをしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・現状のステップアップ講座は、2回連続（11月頃）の講座を年に1回開催。市主催及び共催の認知症サポーター養成講座を開催し、開催日をステップアップ講座の開催日に近い日時で設定。サポーター養成講座参加後、時間を空けずステップアップ講座を開催することで、意欲が冷めないうちに参加いただけるよう工夫している。
- ・対象者については、『認知症の人や家族への支援に関心のある認知症サポーター』と募集案内には明記し、活動意欲の高い方としている。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症本人と直に接する機会として、認知症カフェや、認知症啓発イベントに参加されるグループホーム入居者などと触れ合う機会はあるが、大変少ない。本人への働きかけや、認知症本人をチームの一員にするには至っていない。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・勉強会等で、その重要性は認識しているものの、チームオレンジとして早期から認知症の人や家族の支援をするには至っていない。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・最近では地域での会議に登録者が出席し、認知症支援についての意見交換を行うようになってきた。少しずつ、地域独自の認知症啓発が行われてきている。

<課題>

- ・過去の登録者の中には、登録したこと自体を忘れている方、自身の環境が変わり、チームオレンジあんじょうの活動に参加できない方も一定数ある模様。現登録者の状況を把握するとともに、モチベーションを維持するような働きかけが重要である。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ ステップアップ講座を毎年開催することでチームオレンジあじょうの活動者が増えることで、地域に認知症の理解者を増やすことができる。
- ・ チームオレンジ登録者向けのネットワーク会議を開催し、登録者の声を反映できる機会を創出することで、登録者のモチベーションを維持し、継続的に活動に参加することができる。

9. ここがポイント！

- ・ それぞれの地域の状況や特性を理解している生活支援コーディネーターが、居住地域の登録者をその地域の活動に取り込むことで、地域に密着し、より効果的な認知症啓発活動ができる。また、認知症啓発だけでなく、地域の活動全体が盛り上がる。

<愛知県から>

- ・ 地域に関わりの深い生活支援コーディネーターをチームメンバーとして編成することで、認知症の人やご家族への働きかけがしやすいように工夫されています。
- ・ チームオレンジの活動に関して、認知症啓発イベントなどを通じて引き続きご周知いただき、認知症の人へのさらなる働きかけ、ひいてはご本人がチームメンバーとなり、活動されることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【西尾市】
【チーム名】（オレンジサポーター）
【タイトル】（認知症にやさしいまちへ）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）	
（1）人口	169,177人
（2）高齢者人口	44,294人
（3）高齢化率	26.2%
（4）面積	161.22km ²
（5）日常生活圏域	4圏域
（6）地域包括支援センター数	7か所

2. 活動の概要	
（1）活動開始時期	2022年9月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	・ 寸劇を通して、認知症対応方法を普及啓発 ・ 認知症普及啓発のイベント企画・運営
（4）活動頻度	定例会：月に1回 その他の活動は不定期
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの補助（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、認知症地域支援推進員
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：21人 <以下、チームを構成する属性> オレンジサポーター（認知症サポーター）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員、市職員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・ 認知症サポーター養成講座の受講生から「継続して活動したい！」との声上がり、令和3年度のフォローアップ研修（基礎編）で、どんな活動ができるかグループワークを実施。
- ・ 令和4年度にフォローアップ研修（応用編）を月1回開催し、「自分たちで行える地域での活動」についての話し合いを重ね、寸劇を通じて認知症の理解を深めてもらおうと、劇団「うなぎのねどこ」が立ち上がった。
- ・ 令和5年度は認知症カフェの立ち上げを視野に入れたフォローアップ研修を実施。実際に認知症カフェの代表となったサポーターもいる。

4. 活動内容



市役所や地域での認知症サポーター養成講座等で、劇団「うなぎのねどこ」として認知症の日常あるあるを寸劇にて披露。良い接し方・悪い接し方を演じ、受講者に気づきを促します。

認知症普及啓発イベント「オレンジフェスタ」では新たなシナリオを作成し、「心の中のオレンジリング～認知症にやさしい町へ～」を披露しました。

認知症カフェの立ち上げ支援として、「六万石カフェ」という名称でプレ認知症カフェの開催をしています。オレンジ色のエプロンを着けて活動中です。

こちらの認知症カフェは、西尾市認定認知症カフェになり、現在も活動を続けています。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【メンバーを育成】

- ・ 養成研修のカリキュラムを作成し、毎年メンバーの育成を実施。

【モチベーションの維持・向上】

- ・ 寸劇の内容をメンバー内で検討し、リニューアル。
- ・ やりたいことを検討し、活動内容を拡大していく。

【認知症地域支援推進員との連携】

- ・ 月に1回定例会を開催し、活動内容を共有・検討。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・開催頻度：認知症サポーターフォローアップ研修を年に2回開催。
- ・内 容：認知症の人への適切な声のかけ方を学ぶ。
- ・対 象 者：認知症サポーター養成講座を受講した人。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症カフェや認知症普及啓発イベント「オレンジフェスタ」で認知症の人本人と関わる機会がある。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・認知症カフェで本人やその家族と交流し、思いを聞く。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・メンバーから活動の改善法などの意見が出るようになり、自主化に向け進み始めた。

<課題>

- ・定着化できるようなフォローアップが必要。
- ・活動するための場所・資金が不足している。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・認知症サポーター養成講座を毎年開催し、オレンジサポーターの人数を増やしていく。
- ・活動内容の幅を広げていきたい。

9. ここがポイント！

劇団「うなぎのねどこ」の寸劇は、サポーター同士の絆が深まるにつれて掛け合いが楽しいものになってきました。時にはヒートアップし過ぎて、認知症サポーター養成講座の受講生が引いてしまうことも・・・。

それぞれの得意分野を生かし、活気のある活動を続けています。

<愛知県から>

- ・認知症サポーター養成講座に寸劇を取り入れられており、興味を惹きやすく、かつ、視覚的に分かりやすい工夫をされています。
- ・寸劇は、受講者だけでなく、演者のチームメンバーも楽しく取り組めるものになっているように感じました。



チームオレンジ取組事例【犬山市】

【チーム名】（チーム西コミ）

【タイトル】（コミュニティみんなで地域を支えよう）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	71,007人
（2）高齢者人口	21,097人
（3）高齢化率	29.7%
（4）面積	74.90km ²
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	5か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年4月開始
（2）活動実施主体	市町村、地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	認知症に関する啓発活動
（4）活動頻度	1回／1か月
（5）利用料金	なし
（6）運営財源	市町村からの委託（重層的支援体制整備事業交付金）
（7）連携する機関等	高齢者あんしん相談センター、市役所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：15人 <以下、チームを構成する属性> 犬山西コミュニティ役員及び会員、地域住民、高齢者あんしん相談センター職員、市高齢者支援課担当者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員・市高齢者支援課職員
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【課題】

- ・ 認知症高齢者に対する理解と対応が難しい地域で、共生する方法を模索中であった。
- ・ 一部の地域住民からは、あたたかい見守りの目もあり、地域全体に浸透させていきたいと考えていた。

【きっかけ】

- ・ コミュニティの役員から市に対し、認知症高齢者に対する取組が何かできないかと相談を受け、チームオレンジについて説明し、協力してもらえないか相談をしたところ、新たな活動はできないが、もともとコミュニティの活動で行っていた定期的な講座の開催や日常の活動の中での見守りや声かけはできると返事をいただいた。

【関係機関への調整等】

- ・ 市から担当圏域の犬山北地区及び犬山南地区の高齢者あんしん相談センターに声をかけ、一緒に取り組むことになった。
- ・ 犬山西コミュニティの役員会に出席して役員の方々から意見をもらい、実際の活動がチームオレンジの目的に沿う活動であることを確認・理解してもらった。その中で、実際にできることや今後の地域で取り組んでいきたいことなどの意見交換をしながら、活動内容を検討した。
- ・ 会員や会員以外にも認知症サポーター養成講座やステップアップ講座を受講してもらい、ACPについての講座や体操教室などを交えながら、知識の普及等に取り組んだ。

4. 活動内容

【講座】

- ・ 認知症サポーター養成講座（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
- ・ 認知症サポーターステップアップ講座（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
- ・ 人生会議（ACP講座）（講師：尾北医師会地域ケア協力センター）
- ・ 終活（エンディングノート含む）について（講師：平安閣職員）
- ・ 介護予防講座・高齢者福祉サービスの説明（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
- ・ チームオレンジの役割、事例紹介（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
- ・ 音楽療法（講師：岐阜県音楽療法士）
- ・ 認知症声かけ訓練（協力：高齢者あんしん相談センター・市）

【現在の活動】

- ・ 1回／月、認知症に関する講座やイベントを開催している。
- ・ 認知症の普及啓発を目的として「劇団西コミ」を立ち上げ、認知症の方の対応について、場面設定をした動画を作成して市内で認知症サポーター養成講座の開催時に上映を予定している。
- ・ 徘徊高齢者声かけ訓練を実施し、高齢者への声かけを体験した。

【 日頃の活動の様子 】

在宅医療の講演▼



介護施設職員の講演▼



お花見会での二胡演奏▼



介護予防体操▼



認知症声掛け訓練▼



音楽療法▼
(Xmasコンサート)



劇団西コミの小物づくり▼



劇団西コミ撮影▼



回想法▼



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【活動が軌道に乗るまでの試行錯誤】

- ・ 結成に向けて、月1回のコミュニティ役員定例会（夜間）に何度も出席したが、初めの頃は何か新しいことを押し付けられるのではという認識の方もみえた。何度か意見交換する中で、役員から「こんなことならできる」「これならすでにやっている」などと前向きな意見が出てくるようになり、活動開始に至った。
- ・ 活動に対する賛同者がいる一方で消極的な方もおり、チーム内でも温度差が生じた。

【モチベーションを上げるために】

- ・アルツハイマー月間に行った犬山オレンジフェスタ参加者に配布するマスコット作りのお手伝い。
- ・寸劇に使用する小物を自主制作し、撮影に臨んだ。
- ・長く活動を継続してもらうために、楽しく認知症について学べるような体験を交えて活動を行っている。

【その他】

- ・チームオレンジの活動は、コミュニティの活動の一環であり、他にも多世代にわたる活動も計画されているため、必要に応じて学校教育課や保健センターなど、関係機関へのつなぎを行った。
- ・コミュニティの活動が、認知症の人も含めた活動であるという意識が強くなり、自分事として考えた取り組みへの意欲が高まってきた。
- ・第2層生活支援コーディネーターと連携して、地域資源マップへの情報掲載や、活動をホームページで掲載してもらい情報を発信している。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・開催頻度：随時
- ・対象者：犬山西コミュニティ役員・会員、認知症サポーター養成講座受講者、地域住民

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症当事者からの直接的な相談は受けていないが、気になる人がいたら、コミュニティ内で情報共有し活動参加を呼びかけている。
- ・メンバーが地域で見守り活動を行っているケースもある。
- ・認知機能の低下により、引きこもりがちな方に対して、外出機会のきっかけづくりや地域とのつながりが保てるように活動している。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・当事者や家族からの相談は少なく、認知症であることを隠し社会参加の機会が少ない地域性があり、把握した時には介護保険サービスに繋ぐ必要があることが多い。
- ・家族からは在宅生活に支障があることが多く、民生委員児童委員や地域住民からは独居の方の相談が多い。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症になっても地域の支えがあれば、穏やかに暮らせるという認識を持ってもらえた。
- ・何か大きなことを行うのではなく、普段の関わりの中での小さなことや自分でできることから始めているメンバーもいる。

<課題>

- ・コミュニティ中心の活動であるため、新たな参加者や多世代に渡る賛同者の獲得が難しい。
- ・引き続き地域住民で話し合えるような働きかけが必要である。
- ・生活圏域が2つにまたいでいるため、地域特性や考え方の違い、活動の幅を広げるにあたり壁がある。
- ・参加者たちと自主的に活動できる体制づくりの構築。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・もともと活動的に取り組んでいたコミュニティの活動の一つとして、認知症に関することも含めた活動を続けてほしい。
- ・地域住民が気軽に立ち寄れる場所として認識、利用をしてほしい。
- ・できていることやこれからどんなことができるかを話し合いながら、地域全体の見守り体制がさらに強化し、小さなことから少しずつ積み重ねて活動していく。
- ・普段から身近な場面で起こり得ること、自分もなり得ることという意識が高まってきたため、色々な意見を出し合いながら継続した活動になってほしい。
- ・認知症サポーター養成講座を含め認知症に対して正しい知識や理解の普及、啓発ができるよう学校との連携。
- ・より地域住民との連携がつながるよう民生委員との連携。

9. ここがポイント！

- ・メンバーの意見を大切にして、活動に反映してくれるチャーミングな女性メンバーがチーム西コミを支えてくれています。全体的に和気あいあいとしたチームで、みんなで仲良く、今後も活動していきます！

<愛知県から>

- ・認知症声掛け訓練や音楽療法など、回ごとで開催内容が大きく異なるので、継続的に参加されている方が飽きない工夫をされているところが印象的でした。
- ・チームメンバーのモチベーションの維持・向上のため、認知症啓発イベントで配布予定のマスコット作りをチーム一丸となって行われるなど、自分がチームオレンジの一員であることが体感しやすいように工夫されているように感じました。



チームオレンジ取組事例【犬山市 羽黒・池野地区】

【チーム名】（はぐいけ会）

【タイトル】（共感の場づくり）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	71,007人
（2）高齢者人口	21,097人
（3）高齢化率	29.7%
（4）面積	74.90km ²
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	5か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年4月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター
（3）活動内容	介護者のための共感の場づくり、介護に関する講座
（4）活動頻度	2か月に1回程度
（5）利用料金	イベント内容によって、場所代や材料費がかかる場合があります（事前にお知らせします）。
（6）運営財源	市町村からの委託（重層的支援体制整備事業交付金） ※R5までは地域支援事業交付金
（7）連携する機関等	生活支援コーディネーター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：7人 <以下、チームを構成する属性> 介護者、高齢者あんしん相談センター職員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員 地域包括支援センター職員
（10）チームオレンジの類型	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【経緯】

羽黒・池野地区は犬山市内では団地も多く、世帯数も多い。高齢者数も最多で認知症を患われている住民も相対的に多い。地域包括支援センターにも多様な相談が入る中、職員が抱えているケースの中で、男性介護者から「自分たちもどこかに介護の大変さを分かち合える場所はないかな」との声があり、それをきっかけにチームオレンジの立ち上げに至った。

【経過】

現在は男性介護者に限らず、認知症を患われた家族の女性介護者も参加しており、チームオレンジコーディネーターを中心にチームオレンジを隔月で開催している。同じ認知症に向き合っている介護への思いや女性目線での意見などを話しあい、「共感の場づくり」として、また、アイデアを得たり、思いを語れる場として活動を継続している。

4. 活動内容

介護者のための共感の場づくりとして、気軽に会話する茶話形式や、認知症の方でも参加できる料理教室、認知症に関連する講座等を行っている。年末開催時は広い会場でイベントを開催、当事者や家族も含め参加者数も多い。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

参加者数はやや減っているため、集客や開催内容は毎回試行錯誤している。活動のキーマンは住民の方。住民同士のつながりや生活支援コーディネーター、包括他職種とも連携してイベント内容を考え、参加者維持に取り組んでいる。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

ステップアップ講座は随時ですが、興味がある方を対象に開催しています。

<認知症の人本人への働きかけについて>

本人の気持ちを否定しないよう、ペースを見守りながら対応しています。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

家族の困った気持ちをどう吐き出してもらうか、どう見方を変えて対応してもらうか、多職種間で情報共有して誰でも対応できるようにしている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

認知症について誰でも起こりうる病気であることは理解いただけたと感じる。

<課題>

参加者の高齢化もあり、担い手づくりが課題となっている。また、参加者数はやや減っているため、集客・維持は毎回試行錯誤している。サロン参加者や施設利用者の家族へのアプローチなど生活支援コーディネーターや他職種とも連携しながら取り組む必要がある。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

地域資源にかかわる方々などにも参加を呼び掛けたい（スーパーや銀行、民生委員など）チームの輪が地域に広げ、地域一丸のチームオレンジとなって活動できれば嬉しい。

9. ここがポイント！

ゆったりとした雰囲気でも何でも話せるチームです、認知症に興味がある方はぜひ参加ください。

<愛知県から>

- ・茶話形式の交流会は、介護者がリラックスできるだけでなく、普段の困りごとや思いを自然に引き出しやすくなる効果もあるように感じました。
- ・チームメンバーには、現在は女性介護者も参加されているということで、男性・女性の両方の多角的な視点で取組を進められることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【常滑市】

【チーム名】（チームオレンジとことこ）

【タイトル】（笑顔で活動・地域へ広げる支援の輪！）

1. 自治体情報（2025年6月1日現在）

（1）人口	58,590人
（2）高齢者人口	15,121人
（3）高齢化率	25.81%
（4）面積	55.90km ²
（5）日常生活圏域	3圏域
（6）地域包括支援センター数	3か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年4月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	居場所・サロン・個別支援・啓発活動・ 重層的支援活動
（4）活動頻度	居場所・サロン／週1回、その他は随時対応
（5）利用料金	おいでや：1回100円（お茶・お菓子代） その他は無料
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金） 会費・参加費
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、行政、生活支援コーディネーター、認知症初期集中支援チーム、障がい者相談支援センター、社会福祉協議会、若年性認知症総合支援センターなどの関係機関
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：登録者約40人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 認知症地域支援推進員、第1層・2層生活支援コーディネーター、社協地域ボランティア（専門チーム）、NPO法人あかり傾聴ボランティア
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	オレンジチューター（認知症地域支援推進員）
（10）チームオレンジの類型	・第1類型（共生志向の標準タイプ） ・第2類型（既存拠点活用タイプ） ・第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ・その他（移動型：啓発活動）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【経緯】

○2017年

- ・11月に「地域ボランティアセンター」が立ち上がる。
- ・常滑市社会福祉協議会に委託配置されている第1層生活支援コーディネーターによるイベントなどでボランティア活動の意志を確認し、300名を超える市民の声をいただき設立。

○2018年

- ・地域ボランティアセンター登録者：208名
- ・介護保険で対応できない内容を中心に（見守り、ゴミ捨て、自宅清掃、散歩、買い物など）依頼を受けて活動開始。

○2019年

- ・認知症がある方の支援増加から認知症に理解ある有資格者など（民生委員、高齢者サポーター、介護職員、保育士、看護師、ケアマネジャー等）にて「認知症理解啓発チーム」の専門チーム（以下、専門チームという。）を組み、早期対応に繋げる。

○2021年

- ・9月に「若年性認知症」、「お元気な認知症」の方への支援が必要になり、「チームオレンジ」設立を前提に暫定的に専門チームで動き出した。
- ・10月に認知症ステップアップ講座開催。受講者で、チームオレンジ活動の趣旨に賛同し、協力いただける方をチームオレンジとしてメンバー登録。
- ・試験的に既存のまちかどサロンを活用し移動型をスタート。

○2022年

- ・4月から「チームオレンジとことこ」の名称にて活動開始（メンバー約40名）。
 - *居場所1か所
 - *誰もが参加できるカフェ2か所（移動式：第2層生活支援コーディネーター常駐）
 - *個別支援（利用2名）
 - ※支援内容 とこなめ市民交流センター内の消毒清掃活動支援
 - 高齢者のゴミ出しボランティアの声かけ・草取り作業付き添い支援
 - *啓発活動（認知症サポーター養成講座、サロン、老人会、イベントへの協力等）
- ・9月から重層的支援を目指し、認知症当事者2名と障がいの方1名の計3名の幅広い支援の活動開始（花壇作りなど）。
- ・活動メンバーは、各地域で代表者を決め、都度、招集している。
- ・活動は、メンバー主導。

○2023年

- ・個別支援（利用5名）
 - ※支援内容 とこなめ市民交流センター内の消毒清掃活動支援
 - 草取り作業付き添い支援
 - 居場所などの社会活動の参加支援
- ・愛知県ピアサポート活動支援事業を受託し、ピアサポート活動の支援を実施。本人の強みを活かせるよう、必要時にはチーム員にて支援する。
 - ① 本人ミーティングの開催（年3～4回）
 - ② 「おれんじみーていんぐ」にて本人同士の交流ブースの設置
 - ③ 認知症ステップアップ研修にて講師依頼

○2024年

- ・個別支援（利用者9名）

※支援内容 高齢者宅の草取り作業付き添い、ボランティア活動同行
とこなめ市民交流センター内の消毒清掃活動支援

- ・ピアサポート活動支援：本人ミーティング、「おれんじみーていんぐ」参加し相談窓口設置、認知症ステップアップ研修・ボランティア活動参加
- ・啓発活動：世界アルツハイマー月間活動：とこにゃんライトアップ
9月21日 アルツハイマーデイに認知症の人と家族の会の全国ライブ配信に参加し、常滑市の活動PRを行う。

【現在】

- ・個別支援（現在利用9名）

※支援内容は、昨年度に加え、ウォーキング同行、スマイルカレッジ見守り

- ・本人ミーティング開催（年4回）ピアサポーター2名
※本人同士で語らえる雰囲気を作り、本人の希望に沿った支援ができるように支援者とともに活動していく。また年1回は、お出かけ企画と一緒に検討する。
- ・社会活動支援の充実：高齢者宅での草取りなど、依頼が入ったときには、支援者が見守りながら一緒に活動中（2名）また、交流センターでの草取り作業も行っている（不定期：2名）。
ボランティア登録をして、研修会の会場準備などを支援者と一緒にいき、研修に参加している（1名）
- ・自身の趣味の教室へ参加する：スマイルカレッジの「デッサン教室」（月1回）参加
- ・「おれんじみーていんぐ」、「認知症ステップアップ研修」は昨年同様継続する。
- ・「ケアパス見直し会議」に参加し自身の思い・考えを話す。

【関係機関への働きかけ】

○第1層生活支援コーディネーターや行政との連携

- ・第1層生活支援コーディネーター
※「地域ボランティア」立ち上げ当時から相談や連携を図り、研修やボランティア会議など共同で実施。「チームオレンジ」設立に向けて連携をより深めた。
- ・行政
※予算や、内容などの調整を担当。関係機関の会議を経て決定。

○NPO法人あかりとの連携

- ・NPO法人あかり・傾聴ボランティアグループへ主旨説明し、理解を得た。活動開始に向けての話し合いや説明会を実施。

○研修

- ・フォローアップ研修：傾聴などの研修（1～2回／年）
- ・ステップアップ研修：認知症に関する講義や認知症介護者家族や認知症当事者やGH入所者などから話を聞いて交流を持たせる内容（1回／年）

○愛称

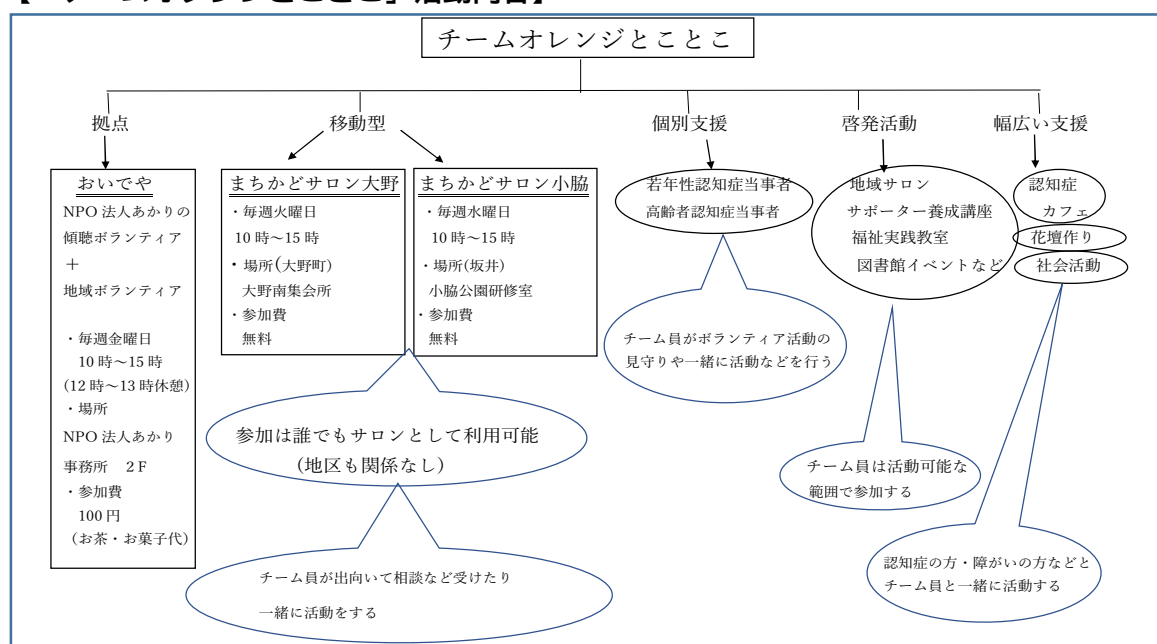
- ・地域ボランティア認知症啓発チームとNPO法人あかり傾聴ボランティアとの合同会議で顔合わせをし、ボランティア同士でネーミングを検討し、「チームオレンジとこ」と決定。

【チームオレンジコーディネーターの役割】

- ・第1層生活支援コーディネーター・行政・NPO法人あかり傾聴ボランティア・地域ボランティア・サロン・ケアマネジャー・障がい担当・公共機関・民生委員・学校など、関係機関と繋がり、認知症理解啓発活動を若い世代～高齢者、全ての住民へ広げ、活動者や認知症当事者との懸け橋になり、安心して生活できる地域づくりに努める。

4. 活動内容

【「チームオレンジとことこ」活動内容】



拠点：おいでや▶



移動型：まちかどサロン大野▼



移動型：まちかどサロン小脇▼



啓発活動：地域サロン、小中学校等にて認知症サポーター養成講座▼



個別支援▼



幅広い支援：花壇作り▼



幅広い支援：認知症カフェ▼



社会活動支援▼（草刈り）



社会活動支援▼（会場準備・認知症ガイドブック改定会議参加）



社会活動支援▼（地域住民とボランティア活動：エコハイキング参加）



チームオレンジとことこ活動チラシ▼

認知症サポーター活動促進・地域づくり推進事業

チームオレンジとことこ ～認知症支援チーム～

「チームオレンジとことこ」とは？

- ・認知症の人とその家族の日々の生活などの相談に応じ、認知症があっても地域で安心して暮らし続け、また地域を支える一員として社会と関わり活躍していける地域づくりのお手伝いをするチームです。

どんなときに相談すればいい？

- ・最近、もの忘れが多いと感じるようになった。
- ・家族や自身が認知症ではないか？と気になり、不安である。
- ・医療、介護サービス、地域活動の場など、社会資源の情報を知りたい。
- ・認知症の人との関わり方で困っていることがある。

どんな支援が受けられるの？

- ・思いを受け止め（傾聴）、また必要に応じ専門機関へつなげていきます。
- ・生活の中での困りごとを改善するための工夫について一緒に考えます。
- ・個々のニーズに合わせた社会活動のお手伝いをします。

チームオレンジとことこのメンバーって？

- ・ステップアップ講座を受講した認知症サポーター、傾聴スタッフ、認知症の人とその家族等で構成されています。

※開催場所、開催日時は裏面に記載してあります※

どこに行けばいいの？

◎市内の居場所として・・・

おいでや

「チームオレンジとことこ おいでや」

開催日 : 毎週金曜日
時 間 : 10:00～15:00 (12:00～13:00 昼休憩)
場 所 : NPO 法人あかり事務所 (常滑市本町)
参加費 : 100 円 (お茶・お菓子代)

まちかどサロン大野

「チームオレンジとことこ まちかどサロン大野」

開催日 : 毎週火曜日
時 間 : 10:00～15:00
場 所 : 大野南集会所 (常滑市大野町)
参加費 : 無料
その他 : 誰でもサロンとして利用可能

まちかどサロン小脇

「チームオレンジとことこ まちかどサロン小脇」

開催日 : 毎週水曜日
時 間 : 10:00～15:00
場 所 : 小脇公園研修室 (常滑市坂井)
参加費 : 無料
その他 : 誰でもサロンとして利用可能

【お問合せ】北部高齢者相談支援センター(基幹型)

☎43-0662

常滑市高齢介護課(直通) ☎47-6133

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【生活支援コーディネーターとの連携】

- ・第1層生活支援コーディネーターとは研修会の開催や、個別支援・啓発活動などについて随時、相談・連携しながら進めている。

【認知症サポーターへの働きかけ】

- ・認知症サポーターの特性を活かせるよう、第1層生活支援コーディネーターと相談しながら協力を依頼している。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・年1回
- ・地域ボランティアセンター内にある認知症理解啓発チーム員で未受講者に声かけ。
- ・認知症サポーター養成講座開催時に、「チームオレンジ」についての主旨説明や活動紹介行い、ステップアップ研修の受講者を募る。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・本人の意思・できることを尊重し、寄り添う姿勢を持つ。また、社会活動参加実現に向け後方支援を行う。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・「チームオレンジとことこ」活動開始時には、チームオレンジメンバーだけでなく、地域包括支援センターの職員や生活支援コーディネーター等も参加し、認知症に関する困りごとだけでなく、生活全般の困りごとにも対応し、問題解決に向け関係機関と情報共有し、必要な支援に繋げていく。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症があっても、認知症当事者のできる活動を重視し、支援されるだけでなく、支援する側にて社会の一員として活動している。最初は一人では難しい活動も、支援者が声かけや少しの手助けをしていたが、今では一人できちんとかなすことができている。また、役割を持って活動することにより、本人の意欲向上にも繋がり、本人からは「楽しい」との声も聴かれ、表情も明るくなった。

<課題>

- ・活動場所までの移動手段
→ 2023年からはタクシー会社を利用した社会福祉協議会からの支援があり、活動場所までの移動手段についての課題は解決した。
- ・病状の進行による活動の見極め

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・幅広い支援を開始し、今後は、障がい相談センター等の障がいに関する関係機関も巻き込んで、地域で誰もが参加できる居場所づくりを広げていきたい。
- ・本人の強みを活かせるような活動を展開していきたい。
- ・「支えられる側」から「支える側」となり、本人の役割づくりをつくり、社会との繋がりを持ち続けられるようにすることで、地域の理解も進むことを期待する。
- ・移動手段でタクシー会社を活用することで、企業への啓発だけでなく、実際に当事者と接することにより対応力の向上や理解を深めることを期待する。
- ・ピアサポーターご本人の声を聴き、ケアパスへ活かしたり、研修でご自身の声を届けたりすることで、認知症の理解を深めることができ、ピアサポーター自身の社会参加の場を増やし役割を持つことができる。

9. ここがポイント！

本市の「チームオレンジとことこ」は、

- (1) 既存拠点型では、傾聴ボランティアが常駐し、認知症当事者やご家族のお話を傾聴し、個々の希望に沿った趣味やニーズに合わせた活動実施。
- (2) まちかどサロン（2か所）では、相談対応できる研修修了者が常駐し、チーム員が参加。生活全般の心配ごと～認知症相談など幅広く受け付け、必要時には地域包括支援センターへ繋げることで迅速な対応ができている。また、誰でも参加できる居場所にて他交流も可能。
- (3) 個別対応では、認知症当事者の強みを活かして、できることをチーム員とともに実施。本人も社会での役割を担っている（清掃活動やゴミ捨て・草取り・ボランティア活動）。

- (4) 認知症啓発活動とサポーター養成講座（小中学校など）や地域サロン、搜索模擬訓練などに参加。市内全域で行っている。
- (5) 障がいの方や若年性認知症の方も活動に参加できるよう、「認知症当事者も同じ仲間」意識で一緒に活動し、認知症当事者も安心して参加することができている。
- (6) チーム員の得意活動を活かせるように、活動別（啓発活動や、個別支援）に参加者を募り、支援者も参加者も楽しい時間を持つことができ、お互い活性化している。
- (7) ピアサポーター活動の支援・展開をすることで、地域における認知症の理解を深め、自身の活動の場も広がる。
- (8) 「意思決定支援」ができるように、関係機関（行政・介護・医療・支援者・チームオレンジなど）と連携をとる

<愛知県から>

- ・各地域資源（サロン、認知症カフェなど）を役割ごとに体系的に整理されているので、それぞれが持つ目標や課題が明瞭になりやすいように感じました。
- ・社会活動支援など、認知症の人が持つ力を信じ、それが最大限発揮できるような場所づくりに尽力されている印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【江南市】

【チーム名】（チームオレンジなんぶ）

【タイトル】（チームオレンジにおける地域活動の推進）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	97,831人
（2）高齢者人口	27,548人
（3）高齢化率	28.1%
（4）面積	30.2km ²
（5）日常生活圏域	3圏域
（6）地域包括支援センター数	3か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年2月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター
（3）活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症カフェの運営（準備設営、受付・講師や演者として出演） ・ 認知症本人・家族のニーズに合わせ、チームメンバーの「できること」をマッチング （認知症カフェ内での案内や対応、認知症本人への傾聴ボランティア、（今後）社協の移送サービス車両活用事業を利用した移送支援）
（4）活動頻度	1回／週～月
（5）利用料金	無料～100円
（6）運営財源	会費・参加費
（7）連携する機関等	所属法人 物忘れ外来 社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	<p>チーム員：19人</p> <p><以下、チームを構成する属性></p> <p>認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員・認知症介護経験者（家族）・サロン代表者、サロン参加者・デイサービス職員・看護師・作業療法士・ヨガ講師</p>
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・2018年8月～地域包括支援センター主催で認知症カフェ「にじいろカフェ」
- ・2019年10月に地域住民からの声で生まれた「五条川ジョイカフェ」を開催。
- ・五条川ジョイカフェの準備会にて認知症サポーター養成講座を開催。その際認知症カフェボランティア（カフェ協力し隊！）を募集。同様ににじいろカフェでもボランティアを募集した。※認知症カフェボランティアは会場設営・準備・おれんじ通信作成等を担当。
- ・認知症カフェ事務局を認知症地域支援推進員はじめ地域包括支援センター職員にて担当、カフェ協力し隊！の手引きや名札を作成し活動しやすい体制を整備。
- ・2021年2月にステップアップ講座を初開催、認知症への理解を深めながら活動についてボランティア間で協議する場を設置し「できることをできるだけ」をモットーにチームオレンジなんぶを結成するに至る。
- ・チームオレンジなんぶの構成メンバーは認知症カフェに通っていた当事者家族、圏域介護施設の職員（認知症サポーター養成講座の中でカフェを知りボランティア希望）、五条川ジョイカフェ立ち上げに関わった地域住民等。
- ・ステップアップ講座を開催（年一回）する中、認知症について学びながら本人について「本人座談会（NHK）」「希望の道（厚生労働省）」等動画を通じ認知症本人の理解を深め、意見交換会では「自分たちの活動について」を話し合った。
- ・2022年5月から、所属法人物忘れ外来の時間帯に合わせ、地域包括支援センター内にて早期相談・早期支援を目的に「認知症本人・家族が気軽に相談できる場」として「おれんじルーム」を開催（週一回）。
- ・おれんじルームに認知症本人の継続参加あり、「人と話をするのが好き」なチームメンバーと認知症本人をマッチング。マッチングについて他のメンバーとも共有する中で「自分ができること」を考えたメンバーから、自分のできること・やりたいことに関する声が事務局側へ上がるようになった。
- ・生活関連企業（スーパーマーケット・市立図書館）からの認知症サポーター養成講座依頼あり。講座に合わせ、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」として包括との連携や継続的な講座（ステップアップ講座含む）開催を提案。
- ・圏域へ移転した市立図書館とも「全世代型認知症啓蒙（アルツハイマーデーイベント）」について協議。2024年9月に市立図書館と共催でアルツハイマー月間として図書館内で認知症書籍展示、制度等のパンフレット掲示を実施、また図書館内で認知症サポーター養成講座開催。同月内にステップアップ講座開催を計画。

4. 活動内容

○認知症カフェ(メンバーが参加・運営)



▲にじいろカフェ（講師：銭太鼓）



▲五条川カフェ（演目：回想法）

〇ステップアップ講座(年1回)



▲チームメンバーが一同に会し、活動についておしゃべり♪



▲今年度のテーマは「認知症バリアフリー」！楽しく盛り上がりました

〇おれんじルーム(メンバーが本人や家族の傾聴役)



▲「ここだから話ができる」場所として、メンバー＆本人のおしゃべりが盛り上がります！



▲認知症の当事者家族が「認知症の疾患」や「本人の対応」について学ぶ教室を隔月開催しています。

〇チームオレンジなんぶ活動推進会議(年1回)



▲先輩サポーターとペアになり「傾聴」のワークショップを実施♪



▲実際の活動について、先輩サポーターと受講生、推進員で協議♪

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・認知症カフェではコロナ禍にて活動場所の変更（法人内会議室・介護施設地域交流スペースから地域共用施設へ）・感染対策として参加者を登録制としリスト化・中止が続いたため定期通信を活用したつながり続ける仕掛けづくり。
 - ・チームオレンジメンバーが「ざっくばらんに意見交換」できる場として、認知症カフェ終了後にぷち反省会を開催。感想を共有することでメンバーの一体感に繋がっている。
 - ・生活関連企業との連携について企業側の温度感・ニーズを丁寧に確認しながら、顔の見える関係作りから具体的な連携内容の提案を行った。その結果、令和6年市立図書館と共催でアルツハイマー月間イベント（図書館イベントホールで認知症サポーター養成講座開催、同施設内オープン会議室でステップアップ講座開催、図書館にて認知症書籍展示）。
- 講座開催後、認知症書籍がほとんど貸与される等好反応であった。
- ・令和6年から認サポ、ステップアップ講座を土曜日開催としたことで現役世代の参加が多くなり、チームオレンジ参加希望者も60歳代等の新規参加者獲得に至った。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

開催頻度：年1回

対象者：認知症サポーター養成講座受講終了者（メンバー活動者は「チームオレンジなんぶ活動推進会議」に出席）

※チームメンバーはステップアップ講座に「先輩サポーター」として参加。

<認知症の人本人への働きかけについて>

認知症地域支援推進員にて認知症ケースを重点的に対応、本人の意向に合わせ認知症カフェやおれんじルームを提案し参加に至っている。

※事例：「家族構成が女性ばかり、妻に誘われる集まりの場も女性が多く男性ともっと関わりたい」ニーズのある認知症本人（男性）。おれんじルームにお誘い、男性メンバー（認知症介護家族の方）やルーム参加者（現在介護している男性家族）をマッチング。本人が過ごせるか心配していた妻も、ルームで男性同士の話に花が咲いている様子から本人の外出に安心感を持てるようになった。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

認知症個別相談は認知症地域支援推進員にて対応。またCMと協働し個別地域ケア会議の中で困りごとを地域課題として取り込んでいる。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

- ・メンバー自身の認知症理解が深まり、「互恵ケア」や「共生」についての意識が育ちつつある。
- ・メンバー自身も地域の仲間であり、カフェやルームに参加していない地域住民を口コミで呼び込む等互助の広がりがある。
- ・メンバー活動を認知症サポーターと共有することで、メンバー自身もモチベーションアップにもつながり、また「自分たちでもできそう」と新規のメンバー獲得にも繋がる期待がある。
- ・生活関連企業にも地域活動の一環としてチーム活動を周知することで「認知症バリアフリー」な地域が醸成される期待がある。

<課題>

- ・子ども世代～現役世代のチームメンバーはあまりなく（子どもは0）、認知症について・認知症の取組について知る機会があまりない。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・カフェ開催当初から参加していた地域住民が要介護状態となり参加困難になるケースが増えてきており、移動支援について協議・検討中。
- ・生活関連企業との連携を推進、チームオレンジなんぶの企業メンバー化。
- ・「認知症を身近に感じてみよう」をテーマに一般向け認知症サポーター養成講座を継続開催し、全世代に向けて「認知症」について発信し自分ごととして考えるきっかけづくり。
- ・「あいち地域包括ポータルサイト」に「チームオレンジなんぶ」のページを掲載。インターネットが利用できる世代も情報がキャッチできる工夫を行った。

9. ここがポイント！

- ・カフェ協力し隊！時代から「出来ることを出来る範囲で」をモットーに活動。メンバーの「活動の場」と「活動内容」を具体的に示しハードルを下げ参加しやすい体制を構築。メンバーが新規メンバーを誘う動きや、ステップアップ講座・ぷち反省会の中で「こうしたい」「これはどうか」等の主体的な意見交換も活発であり、メンバー自身も参加することでやりがいも見いだしている。
- ・認知症カフェでは人数や地域の関係性等から認知症本人や家族の継続利用のできにくさが課題だったが、個別で対応する「おれんじルーム」を開設したことで認知症本人や家族が継続的に参加。チームオレンジの活動の場としてもマッチングしやすい環境となった。
- ・民間企業からの認知症サポーター養成講座依頼をきっかけに企業サポーターを提案、協働することで「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」の考え方・活動を広げ、先々はチームオレンジメンバーの一員となる土壌を作った。

<愛知県から>

- ・認知症カフェ終了後に反省会を開かれることにより、チームオレンジ全体の取組の向上に意欲的な印象を受けました。
- ・子ども～現役世代のメンバーのさらなる参加を課題とされているということで、今後、複数の世代による多角的な視点で活動されることに期待しています。



チームオレンジ取組事例【小牧市】

【チーム名】（チームオレンジきたさと）

【タイトル】（笑顔でつなぐみんなのカフェ）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	148,555人
（2）高齢者人口	38,238人
（3）高齢化率	25.74%
（4）面積	62.81km ²
（5）日常生活圏域	6圏域
（6）地域包括支援センター数	5か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年4月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	カフェの運営、認知症サポーター養成講座
（4）活動頻度	月1日（オレンジカフェきたさと）他、養成講座
（5）利用料金	100円
（6）運営財源	市町村からの補助（地域支援事業交付金）、 会費・参加費
（7）連携する機関等	薬局（構成メンバー含む）、小牧市認知症初期集中支援チーム、認知症サポート医
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：21人 <以下、チームを構成する属性> 市町村職員（地域包括ケア推進課）、認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員、小牧市社会福祉協議会（地域支え合い推進員）、認知症カフェ運営者、薬局（3か所）、郵便局、北里小学校区地域協議会、認知症初期集中支援チーム、認知症サポート医、薬剤師、看護師
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・ 認知症の方が、活躍できる場、人として尊重される場、輝いていた時期を意図的に引き出せるような場、そして認知症の方を介護する家族と支え手となる地域の人々がともに集える場所として、2019年7月に認知症カフェ「オレンジカフェきたさと」を開設した。
- ・ そのような状況の中、認知症サポーターステップアップ講座を受講したオレンジカフェきたさとのメンバーと認知症地域支援推進員、北里地域包括支援センターの職員が勉強会を重ねる中で、チームオレンジの活動について学び、そのことがきっかけとなり「チームオレンジとして、地域の支え手を拡げていきたい。認知症の方が地域で自分らしく暮らせる働きかけができないだろうか。」という声が上がリ、2022年4月に「チームオレンジきたさと」が立ち上がった。
- ・ 認知症初期集中支援チーム員への個別相談や運営支援など、市からの協力を受ける一方、既に認知症カフェとしての活動実績もあったことから、地域からも協力の申し出が次々に上がった。
- ・ チームオレンジメンバーとして、地域の認知症サポート医、看護師、薬剤師等が加わり医療職によるバックアップ体制が強化され、健康相談や講話などの機会が増えた。

4. 活動内容

①認知症カフェ運営・勉強会

- ・ 毎月、第4土曜日に開催している認知症カフェは、常連の顔ぶれはもちろんのこと、他地域の方も受け入れている。
- ・ 認知症カフェのしつらえとしては、所々に季節の花、手作りのコースター、テーブルクロスなど温かみのある演出をし、スタッフは、お揃いのお手製エプロンを着用している。
- ・ 参加者の安否確認、また、カフェの日を忘れている方もみえるため、時間になっても来ていない参加者には参加者名簿を活用し、電話連絡している。
- ・ 笑いが絶えないプログラムとして、みんなの認知症予防ゲームや薬剤師によるミニ講話、季節を感じさせるテーマなど、毎回チームメンバーが工夫をしながら取り入れており、認知症カフェ開催後には、認知症地域支援推進員や専門職を招いて認知症の勉強会を開催している。
- ・ 認知症サポート医、薬剤師による健康相談会や介護相談等の相談機能が充実するようになった。



認知症サポート医のミニ講話▲



オレンジカフェきたさとでの活動の様子▲



オレンジカフェきたさとでの
クリスマス会の様子

◀スタッフのお孫さんも
カフェのお手伝いをしに来場



②認知症サポーター養成講座のサポート

- ・ 2007年から実施している「認知症サポーター養成講座」において、2022年から講座のサポートを行っており、着実に実績を重ねて現在では毎年依頼を頂けるようになっている。
- ・ 生徒に「地域」を身近に感じてもらえるようにと行っている、チームオレンジきたさとのメンバーによる寸劇は、認知症の方への対応を学ぶ上で、とても分かりやすいと好評を得ている。
- ・ また、生徒が自ら考え、自分達の意見をまとめるワークショップの時間を取り入れている事も、学習カリキュラムに基づいた内容と合致し、より認知症の理解・啓発の機会となった。



中学校での認知症サポーター養成講座の様子▲

③認知症サポーターステップアップ講座のサポート

- ・ 小牧市地域包括支援センター主催の「認知症サポーターステップアップ講座」を、2023年以降、チームオレンジきたさととは継続的にサポートしている。

④当事者・介護者の交流の懸け橋

- ・ 認知症カフェとは別日（毎月第4木曜日）に開催している「認知症家族介護者交流会」へ、認知症の介護経験のあるメンバーが積極的に参加し、認知症当事者とその家族にとつてのピアカウンセリングのような働きかけや専門職への繋ぎの役割を担っている。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【共生社会へ向けて】

- ・支える者・支えられる者という垣根をなくし、参加者も気軽に片付けなどに参加しており、カフェスタッフと参加者がともに地域の住民としてカフェを支えられるような雰囲気づくりを心掛けている。

【支え合い地域推進員との連携】

- ・認知症カフェ立ち上げの時から関わりを持っており、認知症カフェ運営のサポートやチームオレンジきたさとのメンバーとしても積極的に活動をいただいている。

【認知症サポーターへの働きかけ】

- ・地域の認知症サポーターを増やしていく。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ステップアップ講座は、毎年開催とし、ステップアップ講座修了者のフォローアップ講座の開催についても検討中。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症があってもなくても誰でも楽しめ、元気を分け合え、笑顔で集える活動をコンセプトとして、一緒に行くこと、寄り添うこと、さり気ない気配り、心配りをメンバーが率先して実践している。
- ・認知症カフェ終了後の反省会などで、互いに良かった点や課題を話し合うことで、対応力を高めている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・どのメンバーもまず、傾聴することにより、寄り添うチームオレンジきたさとを合言葉としており、必ず、活動拠点には専門職の参加を必須としているので、自然な流れの中で、相談としてつなぐことを実践している。
- ・専門職が受けた相談については、本人・家族の同意のもと、必要に応じ、更に専門機関につないで、課題解決を早期に実施できる仕組みを作っている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症カフェのプログラムの中に「みんなの認知症予防ゲーム」などの予防プログラムを取り入れたことにより、チームオレンジきたさとのメンバーの関心が高まり、「認知症予防ゲームリーダー養成講座」を受講するなど、活動からの波及効果が出てきた。
- ・また、チームオレンジきたさとのメンバーによる「認知症サポーター養成講座」と前後して、小学校区の地域協議会福祉部会からも、認知症サポーター養成講座のサポーターとしての活動が生まれるなど、地域の方の活動参加の拡がりを見せている。

<課題>

- ・認知症カフェの開催頻度が「月1回」にとどまっているため、まずは、開催頻度を増やすことが当面の課題。
- ・今後は、常設の活動拠点を目指したいが、場所という資源と人的資源の不足という課題がある。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・チームオレンジきたさとの活動拠点を広げていく仕掛けとして、地域密着型サービス事業所の交流スペースを活用して、認知症カフェや相談会、本人・家族の交流会を増やしていきたいと考えている。
- ・場所の提供と同時に、協力いただける専門職、地域のサポーターを増やしていくことをチームオレンジきたさとのメンバーとともに、今後も地道に進めていきたいと考えている。
- ・出張カフェとして、サロンや老人会、福祉サービス事業所に出向くことも検討している。
- ・他圏域で新しく立ち上げを予定している認知症カフェの運営に協力することで、圏域を越えて活動の輪を広げていきたい。
- ・市内他のチームオレンジメンバーと合同勉強会等を企画し、交流を深めていきたい。

9. ここがポイント！

- ・オレンジカフェきたさと、チームオレンジきたさと、地域協議会などの活動が繋がって、地域活動の輪が広がっています。
- ・北里地域包括支援センターや福祉サービス事業所の専門職が参加することで、メンバーのスキルアップを図るとともに、迅速に相談支援につなぐことができます。

<愛知県から>

- ・認知症カフェにおいて、所々に季節の花を添えるなど視覚的に興味を惹きやすい工夫をされているほか、交流の場に専門職が同席することで専門的な相談をしやすい環境づくりもされています。
- ・認知症カフェ開催後には多職種による勉強会を開催されており、認知症に関する知識の獲得、対応力の向上に意欲的な印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【新城市】

【チーム名】（ちーむおれんぢ新城）

【タイトル】（認知症の方に優しいまちづくりのために活動しています）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	41,838人
（2）高齢者人口	16,096人
（3）高齢化率	38.5%
（4）面積	499.23km ²
（5）日常生活圏域	6圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年12月開始
（2）活動実施主体	市町村、地域包括支援センター
（3）活動内容	定例会、勉強会、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座の参加、認知症カフェの企画運営のサポート、その他認知症に関連する事業への参加等
（4）活動頻度	月1回、他活動依頼に応じて活動
（5）利用料金	なし
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	市内グループホーム、認知症カフェ
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：20人 <以下、チームを構成する属性> 一般の方、健康づくりリーダー兼ボランティア団 体員、認知症カフェ運営者、グループホーム職員 *他オブザーバーとしてグループホーム管理者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	設置なし
（10）チームオレンジの類型	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

認知症本人と家族の方がどんな支援を求めているかアンケート調査を実施しました。その結果、本人からは草刈・野菜づくり・友人と会話・手芸・買い物をしたい、家族からは話し相手や買い物、外に連れ出してほしい等の希望がありました。

そこで、認知症サポーターが手助けできるよう、チームオレンジの立ち上げに向けて、2022年度よりステップアップ講座を実施し、講座修了者へ活動参加を募り、現在は20名の方が活動されています。

チームオレンジコーディネーターの設置は、後々必要になっていくと考えますが、現在は地域包括支援センターの認知症地域支援員が主に、定例会や活動の場の創出やまとめ役を担っています。市としても運営の手助けや活動の場を広げられるように、役割分担かつ協力し合って支援をしていきます。

活動内容は、地域包括支援センターの認知症地域支援推進員や、イベントの運営委員からの提案によるものが多いです。定例会で話し合いをしながら、参加や方針を決めています。

立ち上げ当初は、グループホームのお誕生日会に参加させていただき、認知症の方の対応を学ぶことから始めました。不安や戸惑いが多く感じられる様子でしたが、認知症サポーター養成講座の対応を学ぶ劇に役者として参加、その後もイベントの参加や市内に10か所ある認知症カフェの参加を呼びかけ、現在では認知症カフェのボランティアの一員となり、企画運営の話合いに参加し、運営に参加する等活躍の場を広げています。

4. 活動内容

1. 定例会の実施

月1回集まり、情報交換・勉強会、活動内容の検討等を行っています。

認知症カフェで行う折り紙や紙芝居の練習を行ったりもします。



2. 認知症サポーター養成講座の参加

劇で認知症対応を学ぶ講座や〇×クイズ、活動紹介などを担当しました。

準備片付けなども行います。

3. ボランティア活動

認知症カフェのスタッフで参加やイベントで認知症カフェのPRを行いました。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

(1) 活動が負担にならないために

定例会を「毎月第2金曜日13時30分」からと設定し、参加できる方は来所する、欠席の連絡は不要という体制をとっています。また、LINEのグループ機能を使って情報発信をしています。

(2) 関わり方の不安に対応できるように

グループホーム管理者兼キャラバンメイトの方にオブザーバーとして参加していただいています。グループホームにボランティアとして参加し、勉強をさせていただきました。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

2年に1回開催し、希望される方がチームオレンジに参加できるようにしています。

<認知症の人本人への働きかけについて>

本人が定例会に参加できるように、本人へ働きかける予定です。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

認知症の方本人と家族を対象にアンケートを実施しました。その他日々の活動の中で、地域包括支援センターの認知症地域支援推進員が把握していることを、定例会等で情報提供をしています。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

スタッフが少ない認知症カフェのボランティアや企画を一緒に考え、運営の手助けとなっています。

<課題>

チーム員が自発的に活動できるように支援していきたいと考えています。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

認知症の方本人の希望に沿った支援ができるように今後取り組んでいきたいと考えています。

9. ここがポイント！

チーム員は様々な経歴や個性があふれる方達です。それぞれの得意を生かしてできることから、少しずつ前進しています。

<愛知県から>

- ・定例会への参加を強制しないなど、チームメンバーが楽しく継続的に活動できるような工夫をされていると感じました。
- ・定例会において、多職種間で認知症の人やご家族の困りごとなどの情報交換をするなど、チーム全体で支援ニーズの把握に尽力されている印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【東海市】

【タイトル】（サポーターも楽しんで活動、活躍を！）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	113,369人
（2）高齢者人口	21,873人
（3）高齢化率	22.8%
（4）面積	43.43km ²
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年4月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター
（3）活動内容	定例会参加、認知症事業への支援、つどいの場運営、啓発イベント参加、学生への認知症サポーター養成講座にて紙芝居、本人の話、市開催のマラソンのボランティアで本人支援
（4）活動頻度	月1～2回 ※認知症事業の支援 随時
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	市役所、社会福祉協議会、地域包括支援センター、商工会議所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：【地域サポーター】21人 【企業サポーター】11人 <以下、チームを構成する属性> 【地域】地域住民、認知症地域支援推進員 【企業】介護保険事業所管理者、 介護保険事業所職員、個人事業主（電気、清掃、 建築）、歯科医師
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	・第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ・その他（第1類型に近いがいつでも集まれる拠点ではない）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

【地域】

- ・ チームオレンジの立ち上げに協力してくれる地域サポーターを2020年度末に募集した。毎年2月に実施するフォローアップ講座受講者へ案内、3月社会福祉協議会広報誌に募集記事を掲載した。
- ・ 2021年4月 第1回交流会参加者 10人 → 現在登録サポーター 21人
※第1回のみ交流会とし、以後定例会として月1回実施。
- ・ どんなことができるか定例会で検討を重ね、2022年1月からつどいの場「みかんの花」を実施（月1回2時間）。実施にあたりネーミングはサポーターで決定した。
- ・ 学生対象の認知症サポーター養成講座で紙芝居の協力・本人視点の話、知多メディアネットワークの東海市行政番組内で認知症啓発の寸劇、イベントの参加、市が開催するマラソンのボランティアで本人支援、認知症事業への支援等の協力をしてきている。

【企業】

- ・ 地域サポーターの募集と同時期に、オレンジフェスティバル（東海青年会議所主催で開催された認知症啓発のイベント）の実行委員をしていた方にチームオレンジの立ち上げについて相談。協力していただけることになり、地域サポーターと同じく交流会を実施した。
- ・ 2021年4月 第1回交流会参加者 9人 → 現在登録サポーター 11人
※第1回のみ交流会とし、以後（～R5年まで）定例会として月1回実施。その後は随時開催。

【地域・企業共通】

- ・ チームオレンジコーディネーターが地域サポーター、企業サポーターで行っていることをそれぞれの定例会で報告し、情報共有している。

4. 活動内容

① 定例会

- ・ 地域サポーター（毎月第2金曜日に開催）
- ・ 企業サポーター（随時開催）

② つどいの場「みかんの花」

（2022年1月から月1回しあわせ村にて実施、2023年5月から家族葬のファミリーの会場提供により2ヶ所目実施）

- ・ 対話をメインとしながら、麻雀、将棋、脳トレ、ぬりえ、折り紙等も用意し、参加者のやりたいことをやって過ごしていただいている。本人、家族、地域の方、どなたでも参加できる場。
- ・ スマホの使い方を支援したり、昔の映像や曲を使った回想法を行ったり、サポーターの得意なこと、やりたいことも行う。企業サポーターが参加することもある。最後に「きつともっと体操」（東海市オリジナル）を行っている。

歓談中▼



ギターの生演奏で懐メロ歌唱▼



モルック※体験▼



昔の日常生活の道具を用いた回想法▼



※モルックとはフィンランド発祥のスポーツで、点数を競うことから脳トレにもなるといわれている。企業サポーターからモルックをレクチャーしてもらい、体験した。

③知多メディアネットワークの東海市行政広報番組で寸劇の協力（２０２０年度～）



サポーターが手掛けたシナリオによる寸劇を披露（２０２２年度）▲

④小学生対象の認知症サポーター養成講座で認知症の紙芝居の披露（２０２１年度～）

⑤認知症の本人が働く「ちばる食堂（岡崎市）」を視察（２０２２年）

北名古屋市「回想法」視察（２０２３年）

「バスの来ないバス停プロジェクト」豊橋市NPO法人ぽかぽかの森アンキカフェを視察（２０２４年）

⑥東海商工会議所青年部（企業サポーターが在籍）主催のイベントにブースを出展
（２０２２年１０月）

東海秋祭りで同様に啓発ブースを出展（２０２３年～）

- ・認知症のクイズのあと正解数に応じてモルック体験をする、という流れで担当を決め実施した。事前の準備、飾り付けの作成から協力してくれた。



イベントの様子▲

⑦東海ハーフマラソンにてゴミの収集作業でのボランティア参加（２０２２年～）

⑧アルツハイマーデーイベント、オレンジ展示会の協力（２０２３年）

⑨その他（随時）

- ・企業サポーターは、個人の仕事で認知症の本人の困りごとに各々対応している。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【地域】

- ・コロナ禍の中で活動を開始したが、初回の交流会以降、関係づくりをするために定例会は継続。新型コロナウィルスの感染において心配がある方は、自主的に活動を休んでいただくこととしたが、休まれる方はいなかった。
- ・チームオレンジの周知のために関係者、関係機関をはじめ、認知症サポーター養成講座受講者、フォローアップ講座受講者へもチームオレンジについて説明し、定例会、つどいの場の参加を促した。
- ・チームオレンジコーディネーターが手探りで始めた定例会だったため、その時々でテーマを決めて意見を聞いていった。数ヶ月その状態が続いたため、サポーターから「何をやりたいのかわからない」と言われることがあった。サポーターの自主性を重んじて、コーディネーターから意見を出し過ぎないようにし、方向性について明言を避けたため、サポーターをより混乱させてしまった。
- ・しかし、顔を合わせて対話を続けた結果、サポーターはつどいの場の運営をメインとして活動する形となり、積極的に意見を出してくれるようになった。

【企業】

- ・地域サポーターと同様に、関係を作るため定例会を継続した。しかし、２０２１年度に予定していたイベントがコロナ禍で中止となり、初年度活動は定例会のみとなった。
- ・また、企業サポーターは就業しているため、平日日中の定例会の参加率が低く、２０２３年度からは、夜の時間帯（１８時～）に定例会を実施、その後は随時開催となった。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

【地域】

- ・フォローアップ講座（東海市におけるステップアップ講座の名称）
*年1回（全3回） *認知症サポーター養成講座受講者を対象

【企業】

- ・定例会内で企業向けフォローアップ講座を開催
*チームオレンジ定例会参加者を対象

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症初期集中支援チームや包括で関わっている方の中で、チームオレンジに参加してもらえそうな本人に、認知症事業の情報提供、参加の声かけを行ってもらう。
- ・2023年度より本人が参加しているが、日程等わからなくなるため、個別で事前連絡、当日の連絡をしている。家族にも日程の把握をしてもらい、連絡調整も行う。本人の声を届ける機会を作り、フォローアップ講座の講師をしていただいた。
- ・毎月月末に来月の事業を確認しながら、ご自身が参加する予定を、カレンダーに記入していただくサポートをする。
- ・認知症カフェで、のぼり旗の準備を手伝ってもらう際、手順がわかりやすい様に、数字を縫い付けてサポートしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・つどいの場や認知症カフェにて、本人や家族と会話し、その会話の中から希望や困りごとについて把握する。その内容について定例会で共有する。地域支援包括センターや社会福祉協議会職員にも声かけを行う。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

【地域】

- ・活動を重ねていくごとにチームとして連帯感ができてきた。サポーター同士連携しながら活動している。サポーターが自発的に情報提供したり、活動について提案したりしてくれるようになった。
- ・認知症の本人が「チームオレンジ所属」と認識してくれた。

【企業】

- ・チームオレンジとして、何か形になるものを作りたいと提案があった。
- ・啓発に関して活動の機会を提供してもらい、関係機関と繋がっている。

<課題>

- ・要望があれば、支援について検討できる体制はできているが、本人の声（希望、困りごと）が聞きとれていないこと。
- ・2023年度より認知症本人の参加があり、本人の声を聞くために定例会にも参加してもらったが、活動がたくさんあり、混乱させていると感じる。
- ・企業との関わりに新しい展開が見られず、方向性について検討が必要である。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

【地域】

- ・サポーターがそれぞれの地域のリーダー的存在となり、各地域でつどいの場が開催され、認知症の本人、家族が相談したいときに相談できる体制ができる。

【企業】

- ・企業向けの認知症サポーター養成講座を実施し、企業サポーターを増やすことで、認知症に理解のある企業が増えることを期待している。

9. ここがポイント！

【地域】

- ・サポーターは男性と女性の割合が半々なので、男性も女性も参加しやすい。各々に趣味や特技があり、他のボランティアにも参加しているため、知識が豊富である。そのため、それぞれが互いに刺激を受けている様子で、サポーター自身が楽しんで活動をしている。

【企業】

- ・認知症事業について民間企業の視点を聞くことができる。行政、民間でできることについて、ざっくばらんに話せる関係性となり、お互いが顔を繋ぎ合うことで、人脈が広がっている。

<愛知県から>

- ・フォローアップ講座において、認知症の人に登壇いただくことで、ご本人のお声を受講者へ直接お伝えできる場となるとともに、ご本人にとっても社会参加活動の場となっているように感じました。
- ・つどいの場「みかんの花」において、様々なレクリエーションを実施することで、ご本人やご家族などが継続的に参加しやすいよう工夫されている印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【大府市】

【チーム名】（チームなごみ）

【タイトル】（認知症サポーター養成講座を受けたボランティアが活動）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	93,147人
（2）高齢者人口	20,148人
（3）高齢化率	21.63%
（4）面積	33.66km ²
（5）日常生活圏域	4圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年9月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	・ 認知症カフェ ・ 人形劇
（4）活動頻度	週1回（打ち合わせ、練習等） 認知症カフェは月1回開催
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	自主財源
（7）連携する機関等	大府市社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：12人 <以下、チームを構成する属性> 認知症サポーターである地域住民によるボランティア団体、認知症カフェ運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・ 認知症サポーターフォローアップ講座を受講した後、自分達に何かできることはないかとボランティア団体を立ち上げた。
- ・ 人形劇を通して、認知症の啓発活動を行っていたが、認知症カフェも立ち上げた。
- ・ 自治体が行っている、認知症の方ご本人への支援として認知症の方ご本人のつどいの参加者から、活動できる場所として依頼された。
- ・ 認知症のご本人がチームの一員として参加するようになった。

4. 活動内容

- ・ 認知症カフェ
- *日時：毎月第3水曜日 10時～12時 *場所：大府市社会福祉協議会
- *参加費：100円 *参加者：どなたでも利用可能
- *内容：代表者の話、漫談、参加者の得意なこと、近況 等
- ・ 人形劇による認知症の啓発活動
- *認知症の人とその家族や近所の人が登場する認知症普及啓発の人形劇。
- *講座やイベントで披露。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・ 市が主催するイベント等で人形劇を行っている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ 毎年1回（5回講座）市が開催する認知症サポーターフォローアップ講座にチームのメンバーが全員参加。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・ 参加しているご本人の認知症が進行し、理解力も低下しているが、本人ができることを続けてもらうことでチームの一員として活動をしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・ 家族はご本人が地域と繋がる場所になればと思い送り出してきたが、最近では他のチーム員に迷惑を掛けているのではないかと心配している。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ チームオレンジの活動以外での地域との関わりはないため、この場所でチーム員や地域の方との関わりをととても楽しんでおり、ここでの活動を楽しみにしている。

<課題>

- ・ 移動の手段の問題
- ・ 家族の協力が難しいため、チーム員が誘い合って拠点に集合している。チーム員の負担になっている。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 認知症のご本人の方で、チームなごみでの活動を希望される方がいれば案内していく。
- ・ 認知症のご本人の方を把握することが難しく、活動の活性化は難しい。
- ・ 認知症が疑われる方や、MC I、認知症初期の段階の方を把握する仕組みづくりが必要。

9. ここがポイント！

- ・ 大府市では「チームオレンジおおぶ登録事業実施要綱」を制定しています。
- ・ 市は、次の事業により、市内の「チームオレンジおおぶ」（チームオレンジのうち、要件を満たして大府市に登録されたもの）またはチームオレンジおおぶを立ち上げようとする方をサポートしています。
 - （１）チームオレンジおおぶの立ち上げ支援に関すること。
 - （２）チームオレンジおおぶが行うチームオレンジおおぶ活動の広報に関すること。
 - （３）チームオレンジおおぶからの相談に対する助言に関すること。
 - （４）その他市長が必要と認めること。

<愛知県から>

- ・ 認知症の人の症状の進行具合を的確に把握しつつ、ご本人のやりたいことを尊重し、同じチームメンバーとして一緒に楽しく活動されているように感じました。
- ・ 認知症サポーターフォローアップ講座にチーム全員で参加されるなど、認知症に関する知識の獲得・対応力の向上に意欲的な印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【高浜市】

【タイトル】（もの忘れがあっても大丈夫。仲間と笑顔でつながる家族会）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	48957人
（2）高齢者人口	9602人
（3）高齢化率	19.6%
（4）面積	13.11km ²
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2023年11月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	交流会
（4）活動頻度	おおよそ月1回
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	会費・参加費
（7）連携する機関等	地域包括支援センター・認知症地域支援推進員
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：家族会会員、支援者など12人ほど <以下、チームを構成する属性> 認知症家族会会員、地域包括支援センター（直営）職員、認知症地域支援推進員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（直営）職員（保健師・認知症地域支援推進員）
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- この活動の背景には、もともと介護を担う家族同士の交流の場として始まった家族会がある。長年の活動を通じて会員の高齢化が進み、新しい参加者も少なくなったことで、「今後どう続けていけばよいのか」という不安が共有されるようになった。さらに、会員の中には自らの物忘れを気にする方や、実際に定例会の日程や場所を誤ってしまう方も現れ、活動のあり方を見直すきっかけとなった。
- 一方で、介護を終えた会員にとっても家族会は大切な居場所となっており、たとえもの忘れがあっても従来通り安心して集える場であってほしいという声もあがった。こうした気づきから、家族会は「介護をしている家族」だけでなく、「介護を終えた家族」や「認知症本人」も含め、誰もが想いを語り合える場へと自然に形を変えていった。
- この過程では、地域包括支援センターや認知症地域支援推進員がコーディネーターとして関わり、家族会が「チームオレンジ」へと発展するよう後押しを行った。具体的には、ステップアップ講座を通じて会員の戸惑いを解消し、活動を継続できるよう支援するとともに、関係機関を巻き込んで運営を支える仕組みを整えてきた。

4. 活動内容

月1回の定例会は、ただ集まるだけの場ではなく、参加者それぞれが楽しみにできる時間として続いている。持ち寄ったお菓子や飲み物を囲みながら過ごし、日常の出来事や想いを語り合う。会話は自然に広がり、繰り返しの話や昔の思い出も温かく受け止められることで、安心していられる雰囲気がつくられている。「また来月も来よう」と思えること自体が活動の力になっている。

さらに、年2回は季節の行事を大切にしている。春にはお花見会として、おいしいご飯やお茶を楽しむ。外出に不安を感じる人には仲間が寄り添い、一緒に参加できるよう工夫している。冬には忘年会を開き、一年を振り返りながら、にぎやかに語り合う時間を過ごしている。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【活動が軌道に乗るまでの試行錯誤】

- 活動が続ける中で、会員の一人にもの忘れが見られるようになり、同じ話を繰り返したり日時を間違えたりする場面があった。その様子に戸惑った会員からは「もう会を続けるのは難しいのでは」という不安の声も出てきた。
- しかし、もの忘れがあるからといって交流の場を失うのは惜しいこと、また会員自身が介護経験を通じて認知症への理解を持っていることから、「どう対応すればよいか」をみんなで考える機会を設けることにした。
- そこで、ステップアップ講座を開催し、チームオレンジの取り組みを紹介するとともに、実際の場面を想定して対応を話し合った。こうした学び合いを通じて心理的な負担が軽くなり、「安心して活動が続けられる」という手ごたえが得られ、「チームオレンジ」としての活動へとつながっていった。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

対象は家族会のメンバー全員で、堅苦しい座学ではなく「もしこんな場面があったらどうする？」といった身近な事例を題材にし、みんなで意見を出し合う形で行っている。難しく学ぶのではなく、実際の会で役立つ対応と一緒に考えることで、安心して活動が続けられるようにしている。

<認知症の人本人への働きかけについて>

本人が自分のペースで会に参加できるよう、仲間がさりげなくサポートしている。発言や行動が繰り返しになっても周囲が自然に受け止めて会話をつなげるので、本人も安心できる。花見や忘年会などの行事では、役割を担うのではなく、飲食店や会場への送迎を仲間がそっと支えることで、安心して一緒に楽しめる工夫をしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

定例会は「気軽なおしゃべりの場」であると同時に、「最近こんなことで困っている」と自然に打ち明けられる場所にもなっている。その場には地域包括支援センター職員（認知症地域支援推進員）が同席しており、困りごとがあればすぐに支援につなげられる体制がある。形式ばった相談ではなく世間話の延長で話せるため、本人や家族にとって負担が少なく、安心して情報を共有できるようになっている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

活動が続ける中で、会員同士の認知症に対する理解がより深まり、実際にもの忘れが見られる会員に対しても自然に受け止め、見守りながら声をかけることができるようになった。

また「忘れても大丈夫」「また同じ話をしても、みんなで聞ける」という安心感が共有され、本人にとっても居心地のよい場になっている。介護を続けている家族にとっては気持ちを吐き出せる機会となり、介護を終えた家族にとっては経験を伝え合う場となり、世代や立場を超えた支え合いが生まれている。

<課題>

定例会や花見・忘年会などの行事は安定して続けられている一方、新しい活動への広がりや認知度アップにはまだ課題がある。また、会員の高齢化が進むなかで、今後も新しい参加者を迎え入れられる体制づくりをどう広げていくかが今後の課題となっている。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

認知症の人本人と家族が安心して集える交流の場として、これからも継続していくことが期待される。定例会や花見、忘年会などの活動に加え、必要に応じて新しい工夫や取り組みにも発展していけるとよい。

9. ここがポイント！

古くからのメンバー同士のつながりが強く、それが「安心して集まれる場」を支える力になっている。活動が途切れず続いていること自体が、地域にとっての大きな価値となっている。

<愛知県から>

- ・昔から関わりのある方同士でチームオレンジを立ち上げられたということで、団結力が高く、チームの土台がしっかりされていると感じました。
- ・交流の場には認知症地域支援推進員も同席されており、気軽に相談しやすい環境づくりに力を入れられている印象を受けました。



チームオレンジ取組事例【岩倉市】

【タイトル】（いわくら認知症ケアアドバイザー会による認知症啓発活動について）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	47,933人
（2）高齢者人口	12,016人
（3）高齢化率	25.07%
（4）面積	10.47km ²
（5）日常生活圏域	2圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2008年1月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	認知症啓発活動、認知症カフェ
（4）活動頻度	月2回（みんなのお家ケアドカフェ）
（5）利用料金	1回200円（みんなのお家ケアドカフェ）
（6）運営財源	会費・参加
（7）連携する機関等	市役所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：24人 <以下、チームを構成する属性> ボランティア団体会員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市町村職員（予定）
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・第3期（2006年～2008年）岩倉市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画の認知症に関する取組に位置付け、岩倉市認知症サポーター養成事業の一環として始まった。
- ・2007年に市民を対象とした講座を設定し「岩倉市認知症ケアアドバイザー」を養成する。
- ・市内各所で認知症サポーター養成講座の講師となる活動を開始する。
- ・2010年に市から独立したボランティア団体となり、市内の全小学校（5校）で認知症啓発劇を上演する。
- ・2011年に名称を「いわくら認知症ケアアドバイザー会」と改め、「養成講座」「カフェ」「広報」の部会活動を始める。

【カフェ開設への経緯】

- ・会の目的、役割を考える中で、認知症のことを正しく理解してもらいたいとの思いから養成講座を実施してきた。それとともに、もう一つの思いとして直接認知症の方やその家族の方の支えになりたい思いがあった。
- ・その実現方法として、当時話題にあがってきていた「認知症カフェ」について検討を始めた。岩倉市として会員への情報提供とともに、補助金を活用し、会員に他県の認知症カフェ等にも視察に行けるよう支援した。「認知症カフェ」にもさまざまな運営形態があることを知り、自分たちのできる「認知症カフェ」を模索し、認知症の方やその家族だけでなく誰でも参加できるような現在の運営方法に行きついた。

【カフェの名称について】

- ・役割として認知症カフェにはなるが、来る人たちにそれを知らせる必要はないのではないか、誰もが立ち寄れる場所で認知症の方も普通に受け入れられる空間でありたいとの考えから認知症という名称を外した。地域に根付き、親しまれてきた薬局の名前をいただき「ケアドカフェ“ひろみ”」とした。2022年5月には移転を機に「みんなのお家ケアドカフェ」と名称を変更し運営している。

4. 活動内容

①認知症サポーター養成講座の開催

- ・保健推進員活動や一般市民向け、小学校などの要望があったところに出向き、サポーター養成講座を実施している。

②市の認知症事業の参加

- ・認知症に関する映画上映会や声掛け訓練など市が実施する認知症事業に参加していただき、協力をしていただいている。

③みんなのお家ケアドカフェ（認知症カフェ）の運営・実施

- ・第2・4木曜日午後1時～午後4時までに行っている。
- ・認知症当事者夫婦の家をお借りして運営しており、認知症当事者の参加や複数の男性の参加もある。
- ・会員の中には介護に関する専門職知見を有する者や、社会経験豊富な会員が主に認知症の方の家族の相談に乗ることで家族の精神的負担の軽減や介護技術の助言、相談につながっている。



みんなのお家ケアドカフェの様子▲

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・2021年末に今までケアドカフェひろみが場所の都合で閉店となった。後継の場所を探中で、カフェの目的やカフェに対する想いを会員が再確認した。
- ・人と人とのつながりを大切にし、それを育める場を探したいとの思いから、2022年5月、現在のみんなのお家ケアドカフェの開店となった。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・新規会員の方がいらした時には、県が開催するステップアップ講座の受講を促している。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症当事者が参加することで、他の認知症当事者やその家族が参加しやすい雰囲気となっている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・認知症カフェを認知症当事者の自宅で行うことにより本人及び家族の困りごとを把握することができる。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ 認知症カフェや認知症サポーター養成講座などで介護に関する専門的知見を有する会員や社会経験豊富な会員が、主に認知症の人の家族の相談に乗ることで家族の精神的負担の軽減や介護技術の助言、指導につながっている。

<課題>

- ・ 入会希望者が少ないこと。特に若い年齢の入会希望者がいないため、会員の高齢化が進んでいる。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 認知症サポーター養成講座を継続的に開催し、サポーターの数を増やしていく。
- ・ 認知症カフェが「誰かに伝えたい人」と「教えてほしい人」が自然に集まってくる場所となることで、人と人がつながり、誰もが気軽に集える場として提供する。

9. ここがポイント！

- ・ みんなのお家ケアカフェは、個人宅をお借りして運営しているのでとてもアットホームでくつろげるカフェです。介護について知りたい方、認知症の方やその家族、人とつながりたい方、おしゃべりしたい方、小さなお子さんからお年寄りまでどなたでも参加していただけます。男性の参加も多いのでぜひお越しください。
- ・ みんなのお家ケアカフェのスタッフは高齢者です。でも、侮るなかれ、介護士、ヘルパー、薬剤師、料理上手、折り紙の達人、野菜作り名人、唱歌、歌謡曲、クラシックなんでもござれの音楽好きなど、長年培ってきたものがあります。とびきりのスマイルと朗らかな声でお越しになる皆さんと会話が弾みます。

<愛知県から>

- ・ 認知症カフェを当事者のお宅で開催することで、認知症ご本人やご家族にとって、気軽に参加できるカフェであることが伺えます。写真の様子からも、参加者の皆さんがリラックスして過ごされているのがよく分かります。
- ・ 今後も、世代など個人の属性を問わず、多くの方々が認知症カフェに参加されることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【豊明市】

【チーム名】（チームオレンジチャット）

【タイトル】（おたがいさま活動（暮らしの困りごと支援））

1. 自治体情報（2025年4月1日現在）

（1）人口	67,768人
（2）高齢者人口	17,698人
（3）高齢化率	26.1%
（4）面積	23.22km ²
（5）日常生活圏域	3圏域
（6）地域包括支援センター数	4か所

2. 活動の概要

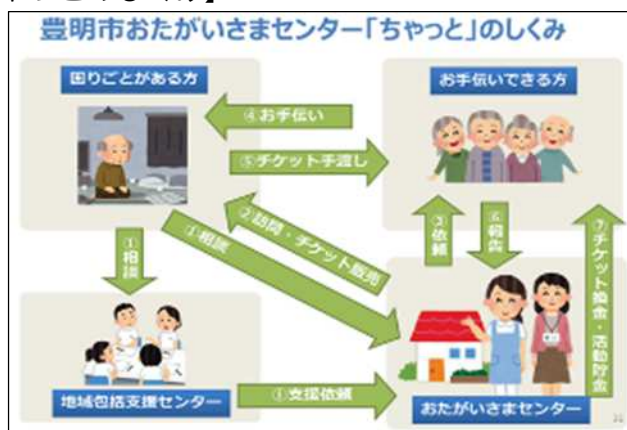
（1）活動開始時期	2017年11月開始
（2）活動実施主体	生活協同組合等
（3）活動内容	住民主体の生活支援活動
（4）活動頻度	週5日
（5）利用料金	30分250円
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	おたがいさまセンターチャット（生活協同組合）
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：162人 <以下、チームを構成する属性> チャットサポーター（登録された住民サポーター）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	生活支援コーディネーター、市町村職員
（10）チームオレンジの種類	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・2011年から「南医療生活協同組合」（名古屋市緑区）が開始した「おたがいさまシート」の取組を起点とする。「おたがいさまシート」とは困った人をサポートする取組であり、「膝が悪くてゴミが出せない」、「帰宅しても話し相手がいない」など「サポートが必要だ」と感じた人がシートを南医療生協の地域ささえあいセンターに提出すると、センターが地域の組合員にサポートを打診し、困りごとの解決を図る仕組みである。
- ・この取組に豊明市が着目。地域で長年支え合い活動を実践してきた「コープあいち」、「JAあいち尾東」に声をかけ、2017年4月に準備委員会を結成した後、約7か月間の準備期間を経て、「おたがいさまセンターちゃっと」を協同で設立。
- ・サービスを開始した2017年11月当時は、利用者数5名、生活サポーター5名の細々とした活動であったが、市の広報活動などの努力が実を結び、2025年3月現在、生活サポーター登録者数おおむね18～85歳の約440名。2024度は毎月約130件の依頼があり、生活サポーターは約120人／月が活動。
- ・サポーターは、事業開始当初は組合員が主体であったが、近年は非組合員が主となり、18歳の学生から88歳の高齢者までが幅広く登録し、活躍している。サポーターの平均年齢は約66歳（学生を除くと平均年齢は約68歳）となっている。
- ・利用者の平均年齢は約82歳となっており、利用者全体のうち要介護認定者は約6割、うち認知症自立度Ⅱa以上は約4割となっている。利用者の認知症の有無ではなく、生活サポーターは”その人”としてサポートを行っている。自然とチームオレンジの役割を担っている。

4. 活動内容

【チームオレンジちゃっとのしくみ】



- ・困りごとがある人（家族を含む）からのニーズの吸い上げは「地域包括支援センター」、サポーターの掘り起こしやマッチングは「おたがいさまセンター」が役割分担。
- ・サポートを求める人とサポーターのマッチングを行うため、「おたがいさまセンター」に地域の事情に詳しく、資源や人材のマッチングに長けた生活体制整備事業に係る生活支援コーディネーターを6名配置。

- ・依頼が入るとコーディネーターが依頼者のもとを訪ねて打ち合わせを行い、対応可能であると判断した場合にサポーターとのマッチングを実施。サポーターと依頼者との顔合わせにはコーディネーターも同席するなど丁寧なサポートを実施。
- ・生活サポーターへ年2回学習講座開催。（そのうち年1回は認知症フォローアップ講座を実施している。）
- ・以下のサービス内容を実施している。
 - ①簡単な掃除、②買い物、③調理、④ゴミ出し、⑤話し相手、
 - ⑥外出の付き添い（通院・買い物等）、⑦布団干し・取り入れ、
 - ⑧季節物の入れ替え、⑨簡単な繕い物、⑩電球・電池交換、
 - ⑪家具の移動（粗大ごみ出し等）、⑫簡単な家具の補修、
 - ⑬花、植木の水やり、⑭狭い範囲の草取り、
 - ⑮簡単な剪定、⑯その他（移送を伴う生活支援も可能）
- ・活動時間は30分単位であり、利用者は30分ごとに250円相当を自己負担する。

普段の活動の様子▼



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・市南部を主な活動領域とする南医療生協、市北部を主な活動領域とするJAあいち尾東農協、市全域を主な活動領域とするコープあいちを運営主体とすることで市全域をカバーすることに成功。
- ・サポートを必要とする人には、近隣のサポーターが手を差し伸べられるよう、自治会単位で、サポートを必要とする人数とそれに応えられるサポーターの人数（需給バランス）を棒グラフにより見える化。生活サポーターの数が不足している自治会に対しては、棒グラフを示し、生活サポーターの掘り起こしを地域へ依頼している。
- ・コーディネーターが、依頼者から丁寧な聞き取りを行うことでミスマッチが生まれにくく、継続的な活動を実現。場合によっては、医療介護関係者等の支援者と連携しながら実施している。生活サポーターは月1回報告会があり、活動の状況やサポーターの迷ったこと等相談ができる場があるため、活動も安心して継続できている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・年1回開催、生活サポーターへ認知症に関する学習講座として、ステップアップ講座を実施。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・生活のちょっとした困りごとのお手伝いを行う。
- ・病院受診や買い物など一緒に同行することも可能なため、一人では不安な時に同行し安心して外出することができる。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・本人や家族の依頼、地域包括支援センターやケアマネジャーからの依頼により、困りごとの把握を行っている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・おたがいさまセンターちゃっとの活動が広まり、依頼や生活サポーター登録数も増加している。生活のちょっとした困りごとを支えあう仕組みが広がっている。

<課題>

- ・住民周知ができていたり高齢者人口の増加に伴い依頼が増加している。そのため、サポーターも限られるため担い手不足とマッチング数の増加が課題となっている。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・生活のちょっとした困りごとを住民主体の助け合いを依頼した人もサポーターも”おたがいさま”の気持ちを継続し、さらに活動を広げていく。

9. ここがポイント！

- ・おたがいさまセンターちゃっとの活動は認知症の有無に分け隔てなく対応を行っている。高齢に伴い、様々な暮らしにくさを少しサポートすることで安心してご自宅での生活が続けられている。
- ・住民主体の取り組みであるため、利用者と生活サポーター及びおたがいさまセンターちゃっとのコーディネーターと支援内容について相談しながら、柔軟に対応を行っている。

<愛知県から>

- ・サービスの利用依頼が毎月約130件もあることから、非常に高い需要があることと、サービス利用後の満足度の高さからくるリピーターも相当数いらっしゃるように感じました。
- ・サービス内容もお掃除やお話の相手など多岐にわたり、利用者の個々の需要に合わせて寄り添われているところが印象的でした。



チームオレンジ取組事例【豊明市】

【チーム名】（チームオレンジまるまる）

【タイトル】（キャラバン・メイトとともに歩む希望の居場所づくり）

1. 自治体情報（2025年4月1日現在）

（1）人口	67,768人
（2）高齢者人口	17,698人
（3）高齢化率	26.1%
（4）面積	23.22km ²
（5）日常生活圏域	3圏域
（6）地域包括支援センター数	4か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年4月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター、キャラバン・メイト
（3）活動内容	認知症カフェ、介護者のつどい、本人ミーティング事業（認知症の人と家族の一体的支援）等での参加支援活動
（4）活動頻度	月6～7日程度
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの委託（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	行政、地域包括支援センター、社会福祉協議会、おたがいさまセンターちゃっと（生活協同組合）
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：20人 <以下、チームを構成する属性> 豊明市キャラバン・メイトまるまる
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員、 生活支援コーディネーター
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・市主催にてキャラバン・メイトを養成。専門職と地域住民とともに”豊明市キャラバン・メイトまるまる”として2016年10月に発足。認知症サポーター養成講座の講師だけではなく、市の認知症に関する講演会の協力や認知症施策の取り組みを認知症地域支援推進員や地域の専門職と協同して推進。認知症サポーター及びキャラバン・メイトのフォローアップ講座開催等実績を重ねてきた。
- ・地道な取り組みにより、地域住民のキャラバン・メイトの認知症に対する理解が深まり、専門職と活動する基盤ができ、豊明市キャラバン・メイトまるまるのメンバーは、認知症カフェや健康麻雀等の地域の集いの場の運営やボランティア活動を積極的に担っている。参加者の中には、認知機能低下の人や認知症の人・家族等が混在して参加しているため、傾聴活動や運営のお手伝い、時には友人としてカフェと一緒に参加する等寄り添いながら活動を行っている。その活動そのものがチームオレンジとなっている。
- ・多様な地域住民と専門職が一体となり、地域の居場所の醸成や認知症に対する偏見の払拭の活動推進となっている。

4. 活動内容

- ・地域の集いの場（認知症カフェ、本人ミーティング、地域の介護予防活動、サロン）における傾聴活動、運営ボランティア、誘いあって一緒に参加。
- ・認知症の人と家族の社会参加の場となっている。



◀普段の活動の様子▼



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・キャラバン・メイトへ行政や社会福祉協議会、地域包括支援センターによる地域活動の紹介を積極的に行い、認知症サポーター養成講座以外の活動の場に参加を促す。活動の場においては、認知症の人と家族が安心して参加継続しやすいよう寄り添い、運営の協力を行っている。
- ・活動における振り返りも一緒に行うことにより、地域のキャラバン・メイトのアイデアや工夫を反映し、主体的に運営ができる。
- ・高齢者ボランティアポイント※を利用し、活動にポイント還元。

※高齢者ボランティアポイントとは、豊明市独自の制度で、高齢者の健康増進や介護予防を促すため、「アクティブ・シニアクラブ」という愛称で65歳以上の市民を対象に、ボランティアとして登録していただき、豊明市が指定する介護施設等でボランティア活動をするとポイントが貯まり、1年で最大10,000円の商品券と交換ができるという、元気な高齢者を応援する制度のこと。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ ステップアップ講座は年1回開催、
豊明市キャラバン・メイトまるまるの定例会は月1回開催

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・ 参加支援や傾聴、楽しむ活動への参加の促し（回想法、ウォーキング等）

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・ 専門職による相談

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ 認知症に対しオープンに話し合える場が地域に増えた。
- ・ 認知症があってもなくても安心して活動に参加できる。

<課題>

- ・ 担い手の養成及びフォローアップ体制づくり。
- ・ 現役世代や企業等と連携したいが、マンパワーが少なく余力がない。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 困りごとからの関わりではなく、認知症カフェや本人ミーティング開催時等で認知症の人と家族とともに「楽しいこと」や「やりたいこと」を一緒に活動し、認知症に関する普及啓発をできる豊明市チームオレンジまるまるを展開していきたい。
- ・ 希望者がいれば、豊明市の認知症希望大使を任命し、認知症に対する偏見やイメージを払拭できるような活動支援を推進、チームオレンジの活動を広く市民に伝えていくことが必要と考えている。

9. ここがポイント！

- ・ キャラバン・メイト活動以外に地域の中で、自然と地域住民と認知症の人や家族と出合いやつながりづくりができています。支援する・支援される関係ではない出会いの場にて展開できています。

<愛知県から>

- ・ 豊明市独自の取組である高齢者ボランティアポイントの活用が印象的でした。チームメンバーのモチベーションの向上につながる魅力的な工夫点だと思います。
- ・ キャラバン・メイトを認知症サポーター養成講座だけでなく、様々な場所において活用することで、関係機関との良好な関係づくりができているように感じました。



チームオレンジ取組事例【北名古屋市】

【チーム名】（コスモス）

【タイトル】（コスモスの花のように華麗に、みんなで輝こう♪）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	85,932人
（2）高齢者人口	20,276人
（3）高齢化率	23.59%
（4）面積	18.37km ²
（5）日常生活圏域	4圏域
（6）地域包括支援センター数	4か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2025年1月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	認知症カフェの運営の手伝い、児童館での壁紙作成、読み聞かせボランティア
（4）活動頻度	認知症カフェ運営の手伝い（奇数月第3火曜日）、児童館での壁紙作成ボランティア（偶数月第1水曜日）、児童館での読み聞かせボランティア（偶数月第2月曜日）
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	自主財源
（7）連携する機関等	北名古屋市中部地域包括支援センター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：5人 地域住民、認知症初期集中支援チーム員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

認知症地域支援推進員が総合相談の中で出会った市民で構成。市民3名と認知症当事者が2名。その当事者より「認知症の自分たちにもできることはないか。病気のある自分たちだからこそできる社会貢献があるのではないか」との声が聞かれた。それぞれの当事者が自分の得意なことを生かしながら社会参加できる場を作り、認知症当事者支援と認知症のある人の活躍を実際に市民が目にすることで地域に根付く古い認知症観（認知症になったら終わり、認知症にならないために何とかしなければ、認知症の人を地域から排除して欲しい）を払拭し新しい認知症観（認知症になっても何となる、認知症があっても住み慣れた場所で生活が続けられるようにするために自分たちにできることはないか考えよう）への転換、当事者意識の醸成と前向きな価値観浸透のきっかけ作りの一助になればという思いの元立ち上がる。

4. 活動内容

認知症当事者本人の願いをメンバーみんなで共有しメンバー同士で楽しみながら叶えることをコンセプトに。皆で楽しみながら社会に貢献できる活動を展開。

- ・ 包括が実施している認知症カフェに参加してもらい運営の手伝い（運営方法に対しての意見を聞く）認知症当事者には相談に来られた人に対して当事者相談員として当事者としての意見を伝えてもらっている。
- ・ 社会に貢献するための活動として児童館をお借りして児童館に掲示する季節の壁面飾り作り、乳幼児対象に絵本の読み聞かせのボランティア活動を展開。
- ・ 「ネイルを綺麗にして手元を明るくしたい！」という当事者の思い実現するため訪問福祉ネイルを認知症カフェにお招きし福祉ネイル体験会を開催した。
- ・ 認知症カフェに愛知県認知症希望大使をお招きし、市と共催しチームオレンジのメンバーと交流会（本人ミーティング）を開催した。認知症希望大使の明るく前向きな姿勢に触れ「人前に出て病気のことを含めて自分のことを開示することを楽しんで取り組める前向きな姿勢が素晴らしい」といった学びを得ることができた。

▼作成した壁面飾り



▼本人ミーティングチラシ



▼福祉ネイル体験会

北名古屋市 認知症カフェ

チームオレンジのみなさん



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・ 認知症当事者は少なからず自分が病気であることを周囲の人に知られたくないという思いがある。認知症当事者が当事者相談員として活動していく上で認知症当事者であることを大々的には公表しないようにすることでプライバシーに配慮し、当事者の気持ちを守るように心がけている。
- ・ 認知症当事者と市民が共に活動する上で支援する側と支援を受ける側に区別しないように配慮している。
- ・ 児童館で活動することで認知症当事者とこれからを担う若い世代との繋がりを作ること意識した。
- ・ 当事者の願いをメンバー全員で叶えるためにはどうしたら良いかをメンバー全員で考え意見を共有し、具体的な方向性を定めることを大切にしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

チーム員は市が開催するステップアップ講座等に参加されている。

<認知症の人本人への働きかけについて>

認知症当事者の意志やできること、得意なことを意識して尊重する姿勢で関わる

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

チームオレンジのメンバーとして北名古屋市の認知症初期集中支援チームの作業療法士に参加を要請し、また、北名古屋市の認知症疾患医療センターとも連携をはかり、認知症があることで生じる社会的障壁などの問題解決に向け情報や課題を共有し必要な支援に繋げるように配慮している。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ 認知症があることを理由に支援する側と支援される側に区別されがちである。病気がある人となない人との垣根を取り除き認知症当事者は支援する側でもありされる側でもあることを市民に知ってもらうための初めの一步を踏み出した。
- ・ 認知症があってもできることがたくさんある。認知症当事者が活躍する姿を若い世代に知ってもらい、安心して認知症になれると感じられる街づくりのきっかけ作りとなった
- ・ 認知症による生きづらさや不安を抱えながら生きる当事者が活動を通して季節の移ろいを感じ子どもや地域の人々と共に過ごしながらか認知症の状態をできるだけ穏やかに保つことができている。

<課題>

- ・ 認知症当事者や車を運転しない参加者も徒歩や公共交通機関で移動でき活動できる場所の確保。
- ・ 認知症の病気の進行程度に応じて展開する活動を見極める必要がある。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ チームオレンジでの活動が認知症の有無の垣根を越えて、病気のある人もない人も共に生きる共生社会実現に向けて新しい認知症観の啓発になると期待している。
- ・ 認知症のある人が安心して過ごせる居場所の一つになれば良いと考えている。

9. ここがポイント！

チームオレンジコスモスは認知症のある人もそうでない人も誰もが安心して過ごせ輝ける場所です。認知症当事者本人の願いをメンバーみんなで共有しメンバー同士で楽しむことを大切に、メンバーそれぞれの強みを生かした社会貢献活動を通して認知症がある人が胸を張って笑顔で生きることができるチームになることを目指しています。みんな違ってみんな良い。認知症になっても大丈夫と堂々と言える地域作りを目指しています。

<愛知県から>

- ・ 認知症カフェにおいて、認知症の人が自ら相談役を担われているとのことで、ピアサポートの機能も充実している印象を受けました。
- ・ チームオレンジの活動が認知症カフェやイベントを通じて地域に広まり、チームメンバーがさらに増えることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【北名古屋市】

【チーム名】（まあるい）

【タイトル】（「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	85,932人
（2）高齢者人口	20,276人
（3）高齢化率	23.59%
（4）面積	18.37㎢
（5）日常生活圏域	4圏域
（6）地域包括支援センター数	4か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2011年1月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	お話、おしゃべり、雑談、散歩の同行、ゴミ出し、電球交換
（4）活動頻度	要相談（20分程度／1回）
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	自主財源
（7）連携する機関等	北名古屋市中部地域包括支援センター、 北名古屋市社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：9人 <以下、チームを構成する属性> 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・2010年度に実施した「おたがいさまねっとスキルアップ研修」（認知症サポーター養成講座を受講し、おたがいさまねっとに登録していただいた方を対象に実施している研修）を受講した方のうち鹿田地区の方が後日集まり、自分たちがやれることを考え、発足したグループ。
- ・月に1回ボランティアメンバーで集まり打ち合わせ行い、数か月に1回は鹿田地区内でサロンを開催し、地域住民の交流の場となっていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でサロン活動は中止となり、ゴミ出し支援のみ継続していた。
- ・一時は支援の対象者がいなかったが、2021年度の「おたがいさまねっと講演会」をきっかけに地域包括支援センターと連携し、ケアマネジャーの会などで周知することができ、ゴミ出し支援の活動を再開

4. 活動内容

- ・ケアマネジャーから依頼を受け、週1回可燃ゴミのゴミ回収車が収集に来る前にゴミ出しを実施する。まとめたゴミを玄関の外に出すことは本人が行う。支援者が玄関の外から所定のゴミ収集場所まで運ぶ。
- ・コロナ渦であることと場所の改修工事で中止していたサロン活動を回想法センターの昔懐かしい遊びをお借りして2025年の10月にサロン活動を再開することとなった。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・チーム員同志で集まり今後の活動方針を考えるための「同窓会」を年に1回開催し、チーム員の思いの共有と実現を行うための手立てを考える機会を設けている。その中でゴミ出し支援以外での活動を再開したいとメンバーからの声が挙がりサロン活動を再開することとなった。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・チーム員は、市が開催するステップアップ講座等に参加されている。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・介護サービスでは対応できない困りごとに対応できる。
- ・コロナ渦で縮小したサロン活動を再開することとなり住民との新たなきっかけづくりの場を持つための一歩を踏み出す事ができる状態となった。

<課題>

- ・メンバーの高齢化が進みメンバーのみでの活動の継続が難しく活動するにあたりチームオレンジコーディネーターの積極的な関与が必要。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・サロン運営のためのメンバーが集まれば、縮小していたサロン活動が再開できる。

9. ここがポイント！

- ◎ゴミ出し・一緒にお散歩・傾聴（お話相手）
- ◎ちょっとしたお手伝い（20分程度）をさせてください。その他にもご希望あれば相談にのります。
- ◎鹿田地区を中心に活動中！他の地区の方もご相談ください。
- ◎「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！

チラシ▼

高齢者にやさしいまちづくりを応援中

ボランティアグループ **まあるい**



おたがいさまねっと
チームオレンジ

◎ゴミ出し・一緒にお散歩・傾聴（お話相手）◎
ちょっとしたお手伝い（20分程度）をさせてください。その他にもご希望あれば相談に乗ります。
鹿田地区を中心に活動中！他の地区の方もご相談ください。
「向こう三軒両隣」の心で、出来る範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！

（問い合わせ）
北名古屋市中部地域包括支援センター
0568-21-1733

<愛知県から>

- ・ゴミ出しや散歩の同行など、介護サービスでは対応しきれない部分を上手くカバーされていることから、地域における需要がかなりあるように感じました。
- ・サロン活動の再開を契機に、チームオレンジ活動のさらなる拡充に期待しています。

チームオレンジ取組事例【東郷町】

【チーム名】（傍本みんなのサロン）

【タイトル】（誰でも気軽に参加することが出来るサロン）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	43,916人
（2）高齢者人口	10,056人
（3）高齢化率	22.9%
（4）面積	18.03km ²
（5）日常生活圏域	2圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年6月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	体操や茶話会等
（4）活動頻度	第2・4木曜日（月2回）
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	社会福祉協議会からの補助
（7）連携する機関等	—
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：25人 <以下、チームを構成する属性> 参加者、運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	—
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・ 従来あった通いの場にて、自分のやりたいことについて話し合い、2022年6月より通いの場とサロンの合同開催が始まった。2022年11月、12月に認知症サポーター養成講座・ステップアップ講座を受講した。
- ・ 誰がいつ認知症になっても、いつまでも皆で楽しくサロンを続けていけるよう、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講し、チームオレンジとなった。
- ・ 「認知症だから、チームオレンジだから」と意識するのではなく、自然と声の掛け合いや助け合いを行っている。

4. 活動内容

- ・ 運動と茶話会
 - * はじめに1時間程度の椅子に座って出来る簡単な運動や脳トレ等を行う。道具などを使う運動もあり、皆で楽しく和気あいあいと運動が出来ている。
 - * 茶話会では机を向き合わせてコーヒーやお茶菓子を食べながら楽しく話をする。
 - * ボッチャや卓球等が出来るようになっており、参加者同士が自然と声を掛け合って自由に行っている。
 - * 童謡に合わせて簡単なリズム体操を行ったり、季節に合わせた歌を皆で声を合わせて歌っている。
 - * ためになるミニ講話やお弁当の試食会、マスキングテープで桜の木を作る等のイベントを定期的に行う。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・ 皆で楽しく継続して参加するために、机やいすの設置・片付けなどを協力して行っている。
- ・ サロン以外でも連絡を取り合っており、欠席連絡等お互いの情報共有が出来ている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

ステップアップ講座をサロンで開催し、参加者も一緒にチームとなった。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・認知症の人だから、チームオレンジだからと意識するのではなく、参加者が自然に「一緒に行こう。」と声を掛け合っている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・困りごとの把握のために、地域包括職員等が情報収集を行った。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・自然と声を掛け合っているため、無理なく継続的な参加が出来る。また、参加者による口コミでサロンへの参加者も自然に増えている。
- ・誰でも参加しやすい雰囲気をつくっており、自由に出入りができるため、新規の人でも気軽に参加しやすい。

<課題>

- ・男性の参加者が集まらない。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・今後も地域の通いの場・居場所として機能し、新しい参加者が増えることで地区の繋がりが自然と広がっていく。
- ・無意識に助け合うことが出来ているので、誰が認知症になっても支え合うことが出来る。

9. ここがポイント！

- ・地区の公民館で行っているため、来場が簡単にできます。また、自由参加型のサロンのため、気軽に参加しやすいです。
- ・地区の方が中心で行っているサロンのため、地域での耳より情報や、困りごとの相談なども気軽に行うことが出来ます。

<愛知県から>

- ・レクリエーションや茶話会を通じて、自然体で交流・相談のしやすい関係性や環境を構築されているところが印象的でした。
- ・日頃のチームオレンジの活動が、自然とうまれる声かけや共助の中で行われていることにより、チームオレンジ外でも参加者同士で交流できるような関係づくりに寄与されていると感じました。

チームオレンジ取組事例【東郷町】

【チーム名】（お寺サロン）

【タイトル】（皆でやりたいことを話し合うことが出来るサロン）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	43,916人
（2）高齢者人口	10,056人
（3）高齢化率	22.9%
（4）面積	18.03km ²
（5）日常生活圏域	2圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2022年11月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	茶話会・イベント
（4）活動頻度	月1回
（5）利用料金	200円／回
（6）運営財源	会費・参加費
（7）連携する機関等	—
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：13人 <以下、チームを構成する属性> 参加者、運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	—
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・サロン自体は2022年の11月から始まっており、認知症サポーター養成講座を2023年の7月にサロンの参加者を対象に行った。その後、認知症についての理解を深めたいお話があり、サロンの参加者が認知症サポーターステップアップ講座を2024年の9月に受講したことでチームオレンジとなった。
- ・もともと地域での交流があり、チームオレンジであることを意識するのではなく、今まで通りの声かけを自然に続けている。

4. 活動内容

- ・茶話会とイベント
 - *会場である清安寺で茶話会を行い、おしゃべりを楽しんでいる。
 - *以前に、近隣でサロンの運営を行っていたJAさわやか東郷の協力会員さんの声かけにより、参加者が集まっている。
 - *活動の内容は、参加者で決めており、お花見や歌、町のバスを使っての外出など、1人ではできない催しを行っており、毎回イベントを計画している。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・年間スケジュールを参加者で決めている。
- ・活動の内容は、お花見や歌、町のバスを使っての外出など、1人ではできない催しを行っており、毎回イベントを計画している。
- ・お休みの連絡を取り合っており、お互いに声かけをしながら参加している。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・サロンの年間計画を検討する際に認知症推進員が参加して、参加者と共に講座を検討した結果、ステップアップ講座を実施することになった。
- ・サロンの開催日に、参加者を対象にステップアップ講座を実施した。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・チームオレンジだからと意識するのではなく、今まで通りの声かけを自然に続けている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・地域包括支援センター、生活支援コーディネーター、家族から聞き取りを行った。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・サロンの運営において、サポートメンバーが複数いるため、無理なく活動が継続できている。
- ・自分たちで活動の内容を考えているため、集うことが楽しみになっている。

<課題>

- ・地域内で新たな協力者がいない。
- ・新しいアイデアが出にくい。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・地域での交流があり「お互いさま」が当たり前になっている。
- ・お寺で集まっているため、地域の高齢者の居場所として自然な形で継続できている。
- ・清安寺がお供えのおさがりを放課後デイサービスやこども食堂へ提供する「お寺おやつクラブ」を実施しているため、若い世代との交流も期待できる。

9. ここがポイント！

- ・皆がやりたいことを話し合っ楽しい時間を過ごしています。
- ・活動の内容は、参加者がやりたいことになっており、歌、早口言葉など、多岐にわたって実施されています。

<愛知県から>

- ・活動拠点がお寺ということで、リラックスしやすい環境下で企画のアイデア出しや実際の催しを実施されているように感じました。
- ・「お寺おやつクラブ」による若い世代との交流を通じて、若い世代側に向けて正しい認知症観を啓発する良い機会となることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【東郷町】

【チーム名】（笑って楽しく）

【タイトル】（誰もが参加しやすいサロン）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	43,916人
（2）高齢者人口	10,056人
（3）高齢化率	22.9%
（4）面積	18.03km ²
（5）日常生活圏域	2圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2008年5月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	体操や茶話会等
（4）活動頻度	毎週1回
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの補助（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	—
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：15人 <以下、チームを構成する属性> 参加者、運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	—
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

- ・サロン自体は2008年5月から実施している。そこから認知症サポーター養成講座・ステップアップ講座を受講したのは、2021年7月である。
- ・地域の高齢者の参加者が多く、お互いに支え合うために、サロンのメンバーが認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講し、チームオレンジとなった。
- ・講義で学んだことを活かし、認知症だからと特別扱いするのではなく、誰もがお互いに声を掛け合って参加するようにしている。

4. 活動内容

- ・運動と茶話会
 - * 輪の状態に椅子を並べて、サロンを行う。
 - * 全身を動かす、脳トレーニングになるような軽運動が中心。
 - * 音楽を流しながらゆっくりと体を動かせるストレッチや、徐々に強度をあげつつ軽度の椅子を用いた筋トレなどを行う。
 - * 運動の最中にも参加者同士で交流が図れるように30秒から1分の話を行う。
 - * 自分のペースで行えるように、適宜水分補給をとるように声をかける。
 - * 1時間程度の運動が終わった後、茶話会を行う。
 - * 「チームオレンジだから！」と意識するのではなく、自然にお互いに声を掛け合って助けあう温かい雰囲気の中で、誰でも参加しやすい。



運動と茶話会の様子▲

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・連絡なくお休みの人がいた場合は、何か変わったことがなかったか等連絡をとる体制をとっている。お休みする際には、ほとんど連絡があることが多く、所属感（仲間意識）がしっかりと参加者にも根付いている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ ステップアップ講座を開講するために、地域に出向いて教室の後に講座を行った。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・ 認知症の人を特別扱いするのではなく、教室の参加者がお互いに「一緒に行こう。」と声を掛け合っている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・ 困りごとの把握のために、ケアマネジャーや地域包括、別の地区のサロン、家族等から情報収集を行った。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ お互いに声を掛け合って参加することで、継続して参加することができる。また新しい参加者を誘いやすい。

<課題>

- ・ 男性の参加者が少ないので、男性参加者を増やしたい。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 誰でも参加しやすい通いの場として、今後も展開していくと予想される。
- ・ サロンを通して、様々な人と関わることで、地域の輪がさらに広がっていくのではないかと期待される。

9. ここがポイント！

- ・ 誰もが参加しやすく、通いやすいサロンです。初めての参加でもすぐに溶け込むことのできる温かい雰囲気です。
- ・ 笑って楽しくのスタッフは住民です。地域の耳より情報や、生活の豆知識、実はご近所さんだった！等の新しい発見や関係を作ることができます。

<愛知県から>

- ・ 運動は生活習慣病の予防になるなど非常に重要なものであり、こちらのサロンでは毎回1時間もの運動時間を確保されているところが印象的でした。
- ・ 参加者同士のネットワークがさらに拡大し、新しい方の参加の糸口となることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【豊山町】

【タイトル】（ 気軽に立ち寄れる認知症カフェ運営を目指す ）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	15,947人
（2）高齢者人口	3,504人
（3）高齢化率	21.9%
（4）面積	6.18km ²
（5）日常生活圏域	1圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2024年9月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター
（3）活動内容	・ 認知症カフェの企画・運営 ・ 9月の認知症月間に合わせた、マリーゴールドの花を咲かせるプロジェクトの準備・栽培
（4）活動頻度	月1回程度
（5）利用料金	無料
（6）運営財源	市町村からの補助（地域支援事業交付金）
（7）連携する機関等	民生委員、認知症初期集中支援チーム会議、 居宅介護支援事業所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：14人 <以下、チームを構成する属性> 市町村職員、認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員、認知症カフェ運営者、認知症サポーター
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（直営）
（10）チームオレンジの類型	第3類型（拠点を設置しない個別型タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

2007年より地域住民や学生等を対象に認知症サポーター養成講座を開催した。これまで、サポーター受講数延べ5,000名以上である。しかしステップアップ講座についてはこれまで開講がなかったため、令和6年度に、ステップアップ講座を開催し認知症に関する知識を学ぶ。

認知症カフェについては、社会福祉協議会が毎月開催したが、コロナウイルス流行により休止する。再開に向けて、これまでの課題の改善や本人または家族が行きやすい雰囲気になるための運営内容の検討等を行った。

○2016年度

- ・認知症について知識や理解を深めるための活動として、社会福祉協議会が毎月の認知症カフェ「オレンジカフェ」の開催を開始。
- ・コロナウイルス流行により、2020年より休止。

○2024年8月から講座の修了者（7名）が、チームオレンジミーティングを開催し活動を開始。

4. 活動内容

【認知症カフェ（オレンジカフェ）】

- ・9月の認知症月間に2回開催。
 - ・これまでは開催場所を社会福祉協議会内で行うが、気軽に立ち寄れることや、多くの方に認知症カフェの存在を知る機会を増やすため、役場ロビーで開催する。
- 併せて、認知症簡易検査（タブレット式）の体験を実施し、操作方法などをサポーターに協力いただき、来場者の方に操作方法などレクチャーを行う。



5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

参加については申込不要でだれでも気軽に立ち寄れるようにしており、開催日前日にはチラシの配布やSNS発信し周知を行う。

【運営メンバーが活動するうえでの工夫・配慮】

- ・メンバーの参加は強制しない。できる範囲で活動をしてもらうこととし、接客が得意な人、カフェのドリンク準備など裏方でも協力してもらえるように声掛けを行う。
- ・これまでのオレンジカフェ運営を行ってきた社会福祉協議会の協力も得る。
- ・役場ロビーでカフェを実施することも初めての試みとなるため、庁舎内の調整には地域包括支援センターが主導で行い、サポーターの方には来場者への対応や認知症カフェ運営など当日の役割に専念できるようにする。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

ステップアップ講座は年2回開催

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・認知症カフェ終了後、互いに良かった点や気を付けた方が良かった点など振り返りを行う。
- ・認知症個別相談は認知症地域支援推進員中心とする専門職で対応。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

再開して期間が経過していないので効果を実感するまでは至っていないが、住民の方に認知症カフェの存在や困ったときに気軽に相談できる場があることを知ってもらえたことはひとつの効果と捉えている。

<課題>

- ・認知症カフェに参加したくても移動手段がない、バスの時間が合わないとの意見がある。
- ・メンバーは仕事も両立しているため運営者が少なく新たなメンバーが増えない。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

今後の担い手を見つけるため、成人のサポーターだけでなく、学生等の参加を検討することやフォローアップ体制づくりをする。

認知症の相談が年々増加傾向にあり、対応で悩む家族、住民もたくさんいるため、カフェやチームでの活動を通して認知症を正しく理解し対応ができるような地域づくりを考えていきたい。

9. ここがポイント！

本町は、面積が6 km²ほどでコンパクトな町であるため、多くの認知症カフェを開催することではなく、複数の団体が毎月1回は開催していることで、本人または家族がタイムリーに参加できることや運営団体の負担軽減ができる。

そのため、開催団体が継続的に支援する仕組みや、地域包括支援センターより専門職や認知症サポーターの派遣を行うことで、認知症カフェの質の担保をする。

また、認知症サポーターの方の特技や個性を生かした認知症カフェを実施できるように取り組んでいく。

<愛知県から>

- ・役場ロビーに認知症カフェを設置されており、来所者が他の用事ついでに寄りやすいよう工夫されています。
- ・認知症カフェの継続的な開催により、チームオレンジの活動に関心を持つ方がさらに増えることを期待しています。



チームオレンジ取組事例【扶桑町】

【チーム名】（絆申の会）

【タイトル】（認知症になっても社会参加のできる通いの場）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	34,863人
（2）高齢者人口	9,003人
（3）高齢化率	25.8%
（4）面積	11.2km ²
（5）日常生活圏域	1圏域
（6）地域包括支援センター数	1か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2024年12月開始
（2）活動実施主体	住民・ボランティア
（3）活動内容	通いの場
（4）活動頻度	第1・第3水曜日
（5）利用料金	100円
（6）運営財源	・市町村からの補助（地域支援事業交付金） ・会費・参加費 ・社会福祉協議会の補助金
（7）連携する機関等	扶桑町社会福祉協議会、 扶桑町地域包括支援センター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：約20人 <以下、チームを構成する属性> 認知症サポーター（20名、認知症サポーター養成講座を受講し、その後ステップアップ研修を受講した者のうち、活動者登録を希望した者）（うち1名は愛知県健康づくりリーダー）、認知症当事者および家族（参加希望があれば随時）、認知症地域支援推進員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第2類型（既存拠点活用タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

2020年以前より自主グループ活動として介護予防の取り組みを行う。

2020年に活動主催者の妻が認知症を患う。

2023年に扶桑町の地区サロン事業（通いの場への資金助成および援助を行う）に登録。

2024年に認知症サポーター養成講座およびステップアップ講座を実施（全員受講）

2025年、活動主催者交代。以後も認知症の人も通いやすい通いの場として活動中。

4. 活動内容



回想法の様子



レクリエーションの様子



研修の様子

【絆申の会】

- ・第1、第3水曜日午後1時30分～午後3時まで開催
認知症予防のため、指を良く動かす運動やコグニサイズ、頭と体を使ってシナプソロジーを取り入れている。
- ・軽い筋トレや、転倒予防のための運動
- ・回想法を行っている。一人一人の昔の話などを発表してもらったり、聞いたりすることで、お互いのことを知って、ささいなことなどの気づきにつながるようにしている。
- ・年に数回、お弁当を頼んだり、みんなで外食をしたりお花見をしたり食事会をしている。

【会員さんから相談事】

- ・サロン担当者と密に連携している分、認知機能低下などの困りごとをすぐに相談でき、地域包括支援センターへの共有も早期に出来る。

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・運動だけではなく簡単なプリント（間違い探しや漢字など）に取り組むことで、理解力や認知機能の低下などがないかの確認をしている。出来ないところは皆で一緒に考えたり答え合わせをしている。
- ・回想法をとりいれて、昔の話をしたり聞いたりすることで、一人一人の声を聞くことを大事にしている。
- ・お休みをされている会員さんの普段の状態などの情報を2、3人のお仲間同士で話してもらって様子の変化に気づけるようにしている。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ステップアップ研修はなかなか開催できていない。
- ・サロンに限らず、認知症関連の情報をメンバーに提供して、ステップアップ講座の受講きっかけづくりをしている。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・会員や講師などの区別をせず、仲間同士、気軽に話せる雰囲気づくり
- ・認知症の奥様と一緒に来所されるご主人へ自宅での様子などお話を聞かせてもらったりお互いが悩みを相談しやすい関係づくりをしている。
- ・認知機能低下のある方は、サロンの日を忘れているので、毎回前日、当日に電話をかけている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・サロン担当職員がいるので、ご本人や家族からの困りごとの相談は一緒に話をきいてもらって、社会福祉協議会や地域包括支援センターへ共有することもある。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症の方の家族の方がレクリエーションや体操などリフレッシュできて笑顔になれる。
- ・会員と話をすることで、家族以外との会話ができ、本人も前向きになる。
- ・会員同士の仲間意識が高まり、色々なお友達にも協力依頼をして活動の輪がひろがった。

<課題>

- ・会員が高齢のため、病気やケガなどの入院が多い。
- ・代表兼講師の一人にかかる負担が大きい。会計や部屋の設営などを会員で分担するようにしているが、動く人が毎回同じになってしまう。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・ 会員の方の年齢が高くなり、認知機能の低下もあるので、認知症を正しく理解し対応ができるように、サロンへの共有をしていきたい。
- ・ 認知症の方へ積極的にサロンへの参加を促して、サロンから地域づくりを考えていきたい。

9. ここがポイント！

- ・ 扶桑町の地区サロン事業には、社会福祉協議会にサロン担当者が密に関わっているので困りごとの相談を共有して、すぐに専門職につなげることが出来ます。
- ・ 認知症の当事者や、認知機能低下で少し塞ぎ込みがちな方も、サロンの仲間で声をかけて、活動後に喫茶店に出向いておしゃべりをしたり、気持ちを話してもらえるようしています。
- ・ 連絡網をつくっている所以、些細なことでもすぐに連絡ができるようにしています。
- ・ お客さんではなく、仲間として、今後もサロンに参加できるように、冗談も言い合える雰囲気づくりをしています。

<愛知県から>

- ・ 認知機能の状態をレクリエーションなどの自然な形により把握されており、機能低下が見られれば専門職へつなげられるなど、スムーズな相談体制を構築されているところが印象的でした。
- ・ 参加者同士のネットワークの形成により、お休みされている会員の状況も把握できるよう努められているように感じました。



チームオレンジ取組事例【蟹江町】

【チーム名】（ちーかに（チームオレンジ『かに組』））

【タイトル】（誰もが役割を持ち、人がつながりあえる場所）

1. 自治体情報（2025年8月1日現在）

（1）人口	36,765人
（2）高齢者人口	9,596人
（3）高齢化率	26.1%
（4）面積	11.09km ²
（5）日常生活圏域	1圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 活動の概要

（1）活動開始時期	2021年10月開始
（2）活動実施主体	地域包括支援センター、住民・ボランティア
（3）活動内容	農作業・ミーティング・個別支援、保育所の園庭開放に参加、個別支援、こども食堂の支援
（4）活動頻度	畑活動（随時）、ちーかに倶楽部（1回/月）
（5）利用料金	畑活動（50円/月）、 ちーかに倶楽部（50円/回）
（6）運営財源	・市町村からの委託（地域支援事業交付金、 協働地域づくり支援事業委託金） ・会費・参加費 ・ふれあい・いきいきサロン活動助成金）
（7）連携する機関等	あいち福祉振興会、蟹江町社会福祉協議会、キッズガーデンカリヨンの杜（保育所）、高齢者施設
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：約30人 <以下、チームを構成する属性> 蟹江町地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）、あいち福祉振興会、キャラバン・メイト、当事者・当事者家族、生活支援コーディネーター、地域住民、高齢者施設職員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型	第1類型（共生志向の標準タイプ）

3. 活動の立ち上げの経緯と経過

●立ち上げの経緯

- ・地域のサロンリーダーから、参加者の中で認知症の心配のある方の情報をいただくことがあった。軽度の認知症であればこれまで通っていたサロンに通い続けている方もいる。そういうサロンをチームオレンジにできないかと考えた。
- ・新型コロナウイルス感染症が広がり始め、コロナ禍でも開催しやすい方法として屋外でできることはないか考え、畑活動を提案した。
- ・2021年7月に第1回認知症サポーターステップアップ講座後、チームオレンジ『かに組』（愛称：ちーかに）を立ち上げ、メンバーを募集。9名の参加者と蟹江町東西地域包括支援センターで、同年10月から畑活動を開始した。
- ・畑は、無料で貸していただけたところを協議体等で住民に声掛けし募集したところ、町内に2か所で見つかった。元々その土地の管理を任されていた住民の方や近隣の農家の方に除草や耕作等、荒れた土地の整備にご協力していただいた。

●経過

- ・2021年10月21日、チームオレンジ『かに組』（ちーかに）として鍋蓋・南地区の畑活動をスタート。2022年1月から2か所目の畑活動を城地区で開始。
- ・2021年8月からサポーターミーティングを不定期に開催していたが、2022年9月からミーティングを兼ねた茶話会として“ちーかにサロン”が1回／月の開催となった。2023年4月から町内保育所の地域交流室に場所を移動。2024年4月からサロン名称を“ちーかに倶楽部”に変更。2025年4月からは城地区畑横の空き家に場所を移し、畑活動後の休憩を兼ねてミーティングと茶話会を行っている。
- ・2025年4月から、城地区畑活動に若年性認知症当事者2名が参加となった。

4. 活動内容

●町内2か所で畑活動（随時）

- ・畑活動は月に1～2回。予備日も含めて年間予定表を作っている。夏季は猛暑の日も多く、30分程度の作業で終了したり、中止にすることもある。畑の様子や生育状況を見に行ったときはグループLINEに写真をのせ、各自で収穫してもらうよう声掛けをしている。
- ・雨天中止などの連絡はグループLINEで行っている。
- ・収穫した野菜は、メンバーで持ち帰ったり、子ども食堂協力店や施設など事業所に配っている。

●個別支援

- ・認知症の人のちょっとした困りごとのお手伝いとして本人とサポーターをつなぎ、付き添いなどのサポートをする個別支援を依頼があれば行う。

●ミーティング

- ・当初、畑活動と別日に行っていたが、参加者が少なく、時間帯や場所を変更した。
- ・2025年4月から、城地区畑横の空き家で畑活動後に休憩を兼ねたミーティングと茶話会を行っている。空き家は畑活動中にご近所の方から持ち主の情報を得て連絡を取り、利用許可を得た。

●普及啓発

- ・ 毎月の町の広報誌、3か月に1回の社協の広報誌に活動予定や参加者の募集を掲載している。
- ・ 町内の福祉まつりで、活動の様子を展示、高齢者やちーかにメンバーの手作り品などをゲームの景品とし、活動案内のチラシ等と共に配布している。
- ・ アルツハイマー月間に町立図書館に認知症に関するコーナーを設け、認知症啓発や『ちーかに』の広報活動を行っている。

●その他

- ・ ちーかにメンバーが保育園園庭の畑づくりのお手伝いをしている。南地区畑で毎年サツマイモを作り、園の行事の焼き芋大会に寄付し、当日も手伝いに参加している。
- ・ 町内の就労支援事業所が主催する、こども食堂の手伝いに参加している。
- ・ サポーター同士の交流のために、お花見ランチ会や食事会を行っている。



こども食堂



園の畑



城の畑



南の畑

5. 活動を進めていく上での工夫・配慮

【畑活動】

- ・ 2025年4月から若年性認知症の方2名が城地区畑活動に参加。畑活動後の休憩も含め、交流を重ねることで、より「新しい認知症観」を実感できる活動としている。
- ・ 天候に左右されるため、予備日を設けている。人手が必要な作業や急な作業が必要なときは、グループLINEで参加を呼び掛けている。
- ・ 夏場は2か所の畑でそれぞれ作る作物を分けている。住宅街の畑は日々収穫できる作物、住宅街から離れた広い畑では一度に収穫できる作物を植えるようにしている。
- ・ 暑さ・熱中症対策として、夏場は30分程度の活動にしている。お茶は各自で持参してもらうが、経口補水液や塩飴を準備するようにしている。雑草対策として除草剤の散布や除草シートを使用している。

【メンバー間の交流】

- ・ メンバー間の親睦を深めるため、春に“お花見ランチ会”を開催。秋は収穫したサツマイモを保育園に寄付し、園の焼き芋大会のお手伝いをしている。普段の畑活動は、少人数で集まることが多いため、メンバーが多く集まるような企画（食事会）も行っている。
- ・ 活動に参加できなかったメンバーにも活動の様子がわかるように写真をグループLINEで見てもらえるようにしている。
- ・ 畑活動後はお茶やお菓子を準備し休憩時間を設けている。
- ・ 活動中の事故やケガに備え、参加者はボランティア保険に加入している。

【生活支援コーディネーターとの連携】

- ・ 2022年度以降、社協の生活支援コーディネーターがステップアップ講座を受講し、メンバーとなった。

【認知症サポーターへの働きかけ】

- ・ 地域包括支援センターから年に2回、認知症サポーター養成講座を開催。また、認サポ講座後に年1回ステップアップ講座を開催し、『ちーかに』への参加を呼びかけている。また、認サポや認知症関係の講話依頼があれば、蟹江町の取組として『ちーかに』の活動紹介をしている。
- ・ 2024年からステップアップ講座で認知症当事者のお話として町内に住む若年性認知症の方に参加していただいている。2025年は2名の方にお話を聞き、講座の参加者と一緒にゲームにも参加していただいた。認知症の方も講座参加者と一緒に楽しく時間を過ごすことで、認知症の方も同じように楽しんで日々を送っていることを実感してもらった。この2名の当事者の方には、城地区畑活動や、他事業所の企画にも『ちーかに』として一緒に参加してもらっている。

【活動が軌道に乗るまでの試行錯誤】

- ・ 積極的に活動していただけるサポーターメンバーが少なく、包括から声を掛けていかないと活動ができていない。考え方に温度差があるなど、まだまだ軌道に乗ったとは言えない状況。課題も多いがゆっくりすすめればいいこと、勢いに乗ったほうがいいことなど、しばらくは地域包括支援センターが舵取りしていく必要がある。
- ・ 畑を2か所で始めたが、サポーターメンバーが少なく、メンバーだけで管理するのは難しい。職域サポーターや畑のご近所の方からの協力も必要と考え、広報誌に募集の呼びかけやチラシを作成し、サポーターメンバー以外の参加メンバーもあまり条件は設けず広く参加を呼び掛けている。新しい参加者も少しずつ増えているが、認知症の当事者が、施設入所をきっかけに参加できなくなることもあり、参加者の全体数はあまり増えていない。
- ・ 町の協働地域づくり支援事業やちーかに倶楽部（サポーターミーティング）をサロンとして申請することで活動費を確保している。
- ・ 少人数での畑活動で、夏場の除草の負担が大きいと、除草シートや除草剤を購入し、負担を軽減している。

6. 「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

<ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について>

- ・ 年に1回、8月ごろに開催。その前に認知症サポーター養成講座を2回開催。
（2024年度から、若年性認知症当事者にお話をしてもらう時間を設けている）
対象者は蟹江町在住・在勤で認知症サポーター養成講座受講済みの方。
認サポ講座を受講していなくてもステップアップ講座受講後に認サポ講座を受講する条件で、ステップアップを受講できるようにした。

<認知症の人本人への働きかけについて>

- ・ 広報誌やチラシ上では認知症の方が参加できる活動であることを明記。
- ・ サポーターメンバーのご近所や知り合いの中で、認知症の方で参加できそうな方は一緒に連れて来ていただくよう話している。
- ・ ケアマネや民生委員の方からも紹介してもらったり、情報提供していただくようにお知らせしている。

<認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について>

- ・畑で作業しながら相談に乗ったり、話を聞いたりすることもある。
- ・地域包括支援センターが支援する方やケアマネからの相談、また認知症カフェやケアラズカフェの参加者からの相談などでも把握する機会がある。

7. 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・若年性認知症の方2名に、ステップアップ講座や畑活動に参加してもらうことで、サポーターにとって“認知症の誰か”ではなく“仲間の一人”として意識してもらい、少しずつではあるが「古い認知症観」が変化してきている。
- ・放置された空き地や畑を活用できる。
- ・ご近所の方が畑のことを心配して覗いてくれたり、水を補充してくれたり、除草剤を撒いてくれたりと、メンバー以外の地域住民とのつながりが自然に発生している。
- ・畑のご近所の方から、空き家に関する情報をいただき、包括職員が持ち主と交渉、無料で貸していただけることになった。また、同じくご近所住民から、他の空き家の取り壊しに伴う家財道具の処分の情報をいただき、活用できる不用品をいただくことができた。
- ・地域包括支援センターが参加していることを知り、畑活動の時に介護の相談にご近所の方がみえた。
- ・少しずつ地域の方に活動を知っていただけるようになり、問合せの連絡が入るようになった。
- ・個別支援を少しずつ始めている。
- ・自主的に活動日以外にも畑の様子を見に行く人が増えてきた。
- ・地域の方が野菜の苗を分けてくださるようになった。

<課題>

- ・サポーターメンバーからやりたいことや意見が出るようになってきたが、『ちーかに』の活動としての考え方にずれがある場合がある。意見を聞きつつ、継続的な活動として地域包括支援センターが調整・主導している状態。
- ・夏の畑活動は、雑草の処理や水やり、収穫が追いつかない状態。作業負担を軽減する工夫をしたが、2か所の畑を管理するにはサポーターメンバーの人数が不足している。また、近年夏場の気温が危険な暑さが続き、活動できない期間が長くなってきている。夏季のちーかに活動をどのようにするか、検討している。
- ・認知症の方の参加が少ない。
- ・町内2か所の畑が、住宅街の分かりにくい立地であったり、車がないと不便な立地であるため、認知症の方が一人で参加することが難しい場合がある。
- ・畑活動が、『ちーかに』としての本来の活動の手段ではなく、目的になってきている。

8. 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- ・畑は認知症の方とサポーターメンバーの出会いの場であると同時に、「地域の皆さんの畑」として、ご近所での集いの場となっていく。
- ・若年性認知症の方2名の参加により、様々な活動を一緒に経験することで、古い認知症観が払拭され、「共に生きる」ということを地域全体で実感し意識づけることができる。
- ・『ちーかに』のメンバーが畑以外でも地域で活動できる機会を広げていき、幅広い年齢層の町民と協働できる活動となっていく。

9. ここがポイント！

- ・畑活動は認知症当事者とサポーターを含めた地域の人達との出会いの場。作業を通して会話を楽しみ笑い合える場所です。認知症の方も、知らない誰かではない、仲間の一人と実感することで、このまちで「共に生きる」ということを、みんなで感じ、考えるきっかけになると思います。
- ・参加の最低条件は蟹江町在住・在勤であることだけ（実は蟹江町に何らかのご縁があるならそれでいい）。小さな畑を中心に、誰でも人とつながりを持つことができる活動です。

<愛知県から>

- ・畑の無償の貸し出しや空き家の提供など、地域住民の方が非常に協力的で、地域全体で認知症支援に力を入れられている印象を受けました。
- ・広報誌への掲載など、チームオレンジの広報活動にも力を入れられており、今後一層のチームメンバーの活動充実に期待しています。



<参考>

○チームオレンジの類型について、地域特性や拠点の確保等の理由から以下の特徴的な3類型を参考にチームオレンジを立ち上げます。

(全国キャラバンメイト連絡協議会発行「コーディネーター研修テキスト 認知症サポーターチームオレンジ運営の手引き」から抜粋)

○第1類型【共生志向の標準タイプ】：地域の交流拠点（より所）を設置

- ・サポーター等の活動の拠点であると共に、認知症の人と家族などが、いつでも訪れたりできる普段からのより所とします。認知症の人の社会参加へのハードルが低くなります。
- ・共に集うことにより、サポーターと認知症の人との「顔見知り」「なじみの関係」が成り立ちやすく、認知症状の変化や困りごと等のマッチングと支援の迅速な対応が可能です。
- ・拠点は集まりやすい立地を選ぶことが重要です。
- ・コーディネーターは、チームオレンジ立ち上げ後は、チームのスーパーバイザー的役割での参加となります。
- ・サポーター以外（サポーター予備員）の多様な人々の参加を前提とする地域共生拠点への発展が望めます。

○第2類型【既存拠点活用タイプ】：既にある拠点の活用

- ・既に拠点がある「まちなかサロン」や「認知症カフェ」「介護予防教室」などをチームオレンジとして活用する方法です。
- ・拠点の設置者や運営が介護事業者等の法人の場合は、住民サポーター主体の運営へシフトさせ、法人との協力関係の整理の必要があります。この場合、チームオレンジの三つの基本の整備から始めます。介護事業従事者はつながりの職域サポーターとして、あるいは住民サポーター（ステップアップ講座修了）として、法人は連携する関連機関として活動することなどの整理が必要になります。
- ・既にサポーター主体で運営されているサロン等に関しては、チームオレンジ〇〇サロンへ移行できます。この場合であってもサポーターのステップアップ講座修了と三つの基本の整備は必要です。
- ・既存の活動とチームオレンジの活動を並行して行う場合の整理として、既存の活動をチームオレンジのメニューとして存続させる方法があります。

○第3類型【拠点を設置しない個別支援型タイプ】

- ・活動拠点が確保できない場合にも実施できる方法です。
- ・既存のサロンや認知症カフェなどへチームメンバーが訪問し、活動・支援することも考えられます。
- ・集う拠がないため、認知症の人の社会参加の機会が少なくなります。
- ・サポーターや認知症の人、家族等との交流の機会が少ないため、困りごと支援のマッチングのための情報収集と調整に時間と手間が生じる可能性があります。
- ・チームメンバー同士のコミュニケーションがとりづらいため、LINEやメール等を活用した運営が望まれます。
- ・かつての「やすらぎ支援員」制度に類似しています。
- ・チームリーダーの力量が求められ、チームオレンジ運営の難易度は高いと思われます。

愛知県版チームオレンジ事例集

2020年11月発行

2022年12月更新

2023年11月更新

2024年12月更新

2025年12月更新

愛知県福祉局高齢福祉課地域包括ケア・認知症施策推進室

住 所 〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電 話 052-954-6310

ホームページ <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/chiikihoukatu/>